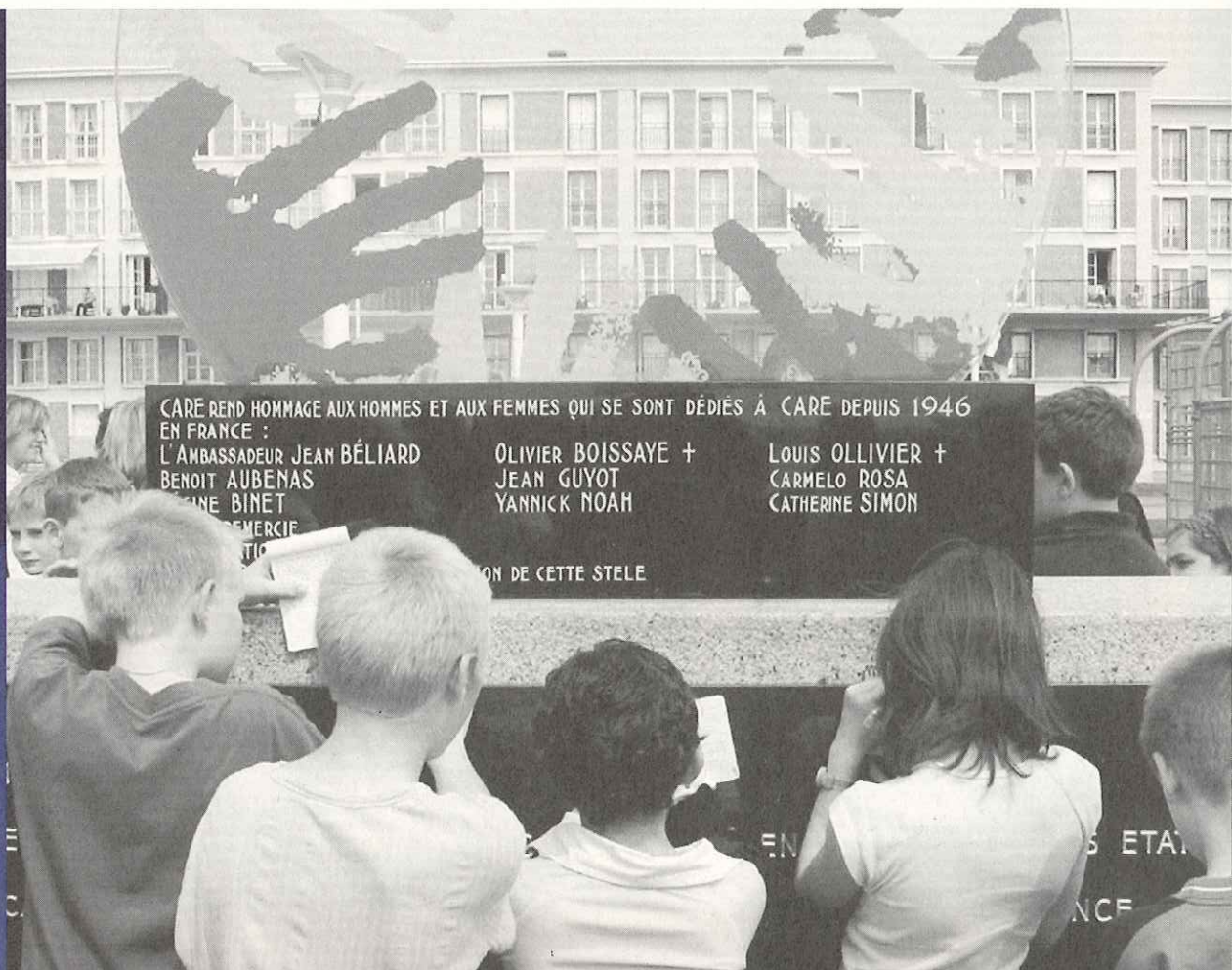


CARE World

Vol. **3** ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
June 2006

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国以上で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。



CARE REND HOMMAGE AUX HOMMES ET AUX FEMMES QUI SE SONT DÉDIÉS À CARE DEPUIS 1946

EN FRANCE :

L'AMBASSADEUR JEAN BÉLIARD

BENOIT AUBENAS

JEANNE BINET

REMERCIEMENTS

À L'OCASION DE CETTE STELE

OLIVIER BOISSAYE +

JEAN GUYOT

YANNICK NOAH

LOUIS OLLIVIER +

CARMELO ROSA

CATHERINE SIMON



care®

CARE World Vol. 3

Contents

- page3 事務局からの報告
- page6 タイ「移動教育事業」終了報告
ケア・インターナショナル ジャパン プログラムコーディネーター 犬飼 裕子
- page8 フィールド最前線
ベトナム「カントー橋建設にかかるHIV/AIDS感染防止事業」
ケア・インターナショナル ジャパン プログラムコーディネーター 犬飼 裕子
- page10 企業とCAREのパートナーシップ
スターバックスとコーヒー生産地
—CAREとのパートナーシップを通じてのコーヒーCSR
スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社 広報室 室長 堀江 裕美
インドネシア「マドゥーラ避難民の生活復興支援プロジェクト」
ケア・インターナショナル ジャパン プログラムコーディネーター 鈴木 幸子
- page13 私スタイルのCAREライフ
ケア・インターナショナル ジャパン ボランティア クレア フォーマン Claire Foreman
- page14 Our Supporters ~会員、寄付金協力者紹介
- page16 CARE Notice Board



事務局からの報告

ケア・インターナショナル ジャパン支援組織 報告

2月18日、岡山国際ホテルにて、ケア フレンズ岡山主催のチャリティーコンサートが開催され、来場者の方は、朝倉まみ氏による手話シャンソンを楽しみました。3月18日には赤坂プリンスホテルにて、ケア フレンズ・東京主催の渡辺貞夫氏による講演会が開かれました。

また、昨年2月に発足したケア・サポーターズクラブ大分に続き、4月23日、熊本市国際交流会館にてケア・サポーターズクラブ熊本の設定総会が開催され、ケア・インターナショナル ジャパン支援組織として活動を開始しました。

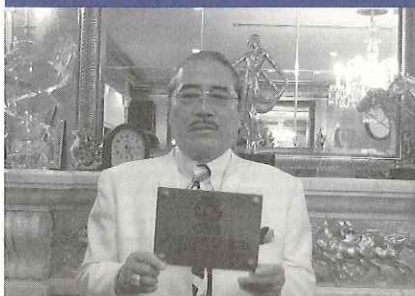
アジアの祭典 チャリティーバザー2006



4月26日、全日空ホテルにおいて、恒例のアジア婦人友好会主催「アジアの祭典」が開催されました。会場ではフィリピン、マレーシア、ベトナム、モンゴルなどの民芸品が販売され、例年通り大変な賑わいを見せました。また、会場内のステージ前では、アジア各国の料理とともに音楽を楽しむ来場者の方々が多く見られました。今年も、CAREは 横田評議員を中心に出席し、この収益金から多額のご寄付をいただきました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

CARE設立60周年 記念式典

贈呈された記念品を手にする関口理事長



5月11日は、CAREパッケージが初めてアメリカの市民からフランスの戦災者に届けられたCARE Dayです。今年では設立60周年ということで、特別なイベントが行われました。世界中から集まったCAREの支援者、関係者、そしてスタッフは、まずCAREパッケージ第一号が届けられたフランスのル・アーブル港で、ルフェナツ市長主催の式典に参加しました。その後、パリのエリゼーでのシラク大統領夫人のレセプション、ロスチャイルド氏の邸宅でのワインパーティ、CAREの関係国大使館でのディナー、と大変華やかな雰囲気の中で祝賀会が行われました。政界や財界などで活躍する指導者が、口をそろえてCAREが使命感をもって活動を続けてきたことの意義を称え、CAREの会長、リディア・マーシャルは、今後も途上国の人々と共に貧困と闘っていくことを宣言しました。

同式典では、60年前に日本でCAREパッケージを受け取り、その恩返しとして日本におけるCAREの設立と発展に多大なる貢献をした関口理事長が、ケア・インターナショナルから表彰されました。当日、式典に出席できなかった関口理事長に代わって、当財団数原理事および野口事務局長が式典に出席し、記念品を受け取りました。



CARE60周年記念碑の前で。左から、CARE会長リディア・マーシャル、副会長マリナ・デ・プラント、事務総長デニ・カイヨー、ル・アーブル市長アントワン・ルフェナツ

スリランカ「プランテーション居住者の生活改善事業（TEAプロジェクト）」終了報告会



6月7日、新しく広尾にオープンしたJICA地球ひろばにて、スリランカにおいて実施している「プランテーション居住者の生活改善事業」の終了報告会を開催しました。2003年から行われてきた事業が終了し、現地でプロジェクトマネージャーを務めた栗原俊輔が報告を行いました。国際協力関係者、また紅茶に関心のある方も多く参加され、会場は熱気にあふれていました。

地域の習慣・規範や閉鎖された環境から生じる根深い問題の改善という困難に挑んだ報告を受けて、参加者からはプロジェクト地の決定方法や現地政府の反応、住民参加の様子などの実務に即した質問が出されました。終了予定時刻を過ぎても議論は止まず、児童労働や教育制度、プランテーション外の地域についても話は及び、活発な発言が相次ぎました。アンケートでは、スリランカの現状に驚く声や今後さらに活動を続けてほしいといった感想が聞かれました。

2005年度追加事業および補正収支予算報告

以下の事業が追加されたことを受け、予算の見直しを行い、3月23日の理事会にて承認されましたので、ご報告いたします。

*前号のニュースレターは3月31日に発行されましたが、制作スケジュールの関係で3月23日の理事会にて承認された内容を掲載できませんでしたので、この号にてご報告させていただくことをどうぞご了承ください。

1. 国際開発協力事業

インドネシア国マドゥーラ避難民の生活復興支援プロジェクト

この事業は、民族対立により避難民となった約1万世帯のマドゥーラ人を対象とし、水と衛生、保健、食糧などの基本的ニーズを満たすことにより、生活の保全を図ることを目標としています。

本年度は、妊婦、乳・幼児およびその母親を中心とする住民への保健サービスおよび栄養改善を対象として、以下の活動を実施します。

- 1) 栄養調査および高い死亡率などの原因分析
- 2) インドネシア政府の成長モニタリングシステムの回復
- 3) 保健ボランティアに対するトレーニングの開催

*この事業の詳細については、本誌11～12ページをご覧ください。

ベトナム国カントー橋建設にかかるHIV/AIDS感染予防事業

この事業は、特別円借款事業として建設されているカントー橋建設に関わる移動建設労働者と周辺コミュニティの

人々のHIV/AIDS感染のリスクを減少させることを目標としています。

本年度は、以下の活動を実施します。

- 1) HIV/AIDSおよびSTD防止、治療に関する啓蒙活動・情報提供
- 2) ヘルスワーカーに対する研修（カウンセリング・スキル向上など）
- 3) クリニック・システムの設置
- 4) 教育グループの形成および教育者の養成
- 5) 企業と地域間のHIV/AIDS感染防止、治療、ケア・サービスの連携向上のための研修

*この事業の詳細については、本誌8、9ページをご覧ください。

パキスタン国地震災害緊急支援

対象地域：パキスタン北西辺境州

予算規模：9,810千円

実施期間：2005年10月～2006年3月（6カ月間）

主支援者：一般寄付

この事業は、パキスタンにおいて2005年10月に発生した地震災害の被害者に対する緊急支援に資することを目標としています。

本年度は、以下の活動を実施します。

- 1) 緊急避難生活用テントの調達
- 2) 現地活動用車両の調達

2. 国際理解教育事業

スマトラ沖津波復興支援 学校における子どもの心のケアプロジェクト フォト・タペストリー・アクティビティ

対象地域：日本の小中学校およびスリランカ国南部ハンパントータ州の小中学校

予算規模：100千円

実施期間：2006年4～5月

主支援者：一般寄付、企業

この事業は、スマトラ沖津波復興支援の一環として実施されている「学校における子どもの心のケアプロジェクト」

のアクティビティの一つとして、この事業に関わった日本とスリランカの児童・生徒を対象として、相互理解を促進し、異なった価値観や文化を尊重する気持ちを育むことを目標としています。

本年度は、以下の活動を実施します。

- 1) 両国の児童・生徒による自国の文化と価値観に関する学習およびフォト・タペストリーの作成
- 2) パートナー校とのフォト・タペストリーの交換
- 3) 相手国の文化、価値観、津波を含めた経験に関する学習と交流

2005年度補正収支予算 総括（基本財産取崩収入・繰入支出含み）

収入の部

(単位：円)

| 明細 | 補正予算(A) | 当初予算(B) | 増減(△) (A)-(B) |
|---------------|-------------|-------------|------------------|
| 1. 基本財産運用収入 | 5,951,000 | 2,602,000 | 3,349,000 |
| 2. 会費収入 | 13,795,000 | 18,210,000 | △4,415,000 |
| 3. 寄付金収入 | 51,937,000 | 59,000,000 | △7,063,000 |
| 4. 協賛金収入 | 50,416,000 | 46,168,000 | 4,248,000 |
| 5. 助成金収入 | 55,788,000 | 57,271,000 | △1,483,000 |
| 6. 雑収入 | 409,000 | 156,000 | 253,000 |
| 7. 基本財産取り崩し収入 | 100,000,000 | 0 | 100,000,000 |
| 収入合計 | 278,296,000 | 183,407,000 | 94,889,000 |

支出の部

(単位：円)

| 科目 | 補正予算(A) | 当初予算(B) | 増減(△) (A)-(B) |
|--------------------|-------------|-------------|------------------|
| 1. 事業費支出 | 150,533,000 | 161,467,000 | △10,934,000 |
| I. 国際開発協力・国際理解教育事業 | 115,528,000 | 121,074,000 | △5,546,000 |
| II. マーケティング | 32,205,000 | 37,793,000 | △5,588,000 |
| III. 国際会議参加費 | 2,800,000 | 2,600,000 | 200,000 |
| 2. 管理費支出 | 14,512,000 | 13,680,000 | 832,000 |
| 1) 人件費 | 9,410,000 | 8,367,000 | 1,043,000 |
| 2) 一般管理費 | 4,727,000 | 4,538,000 | 189,000 |
| 3) 職員人材育成 | 100,000 | 500,000 | △400,000 |
| 4) CI負担金 | 275,000 | 275,000 | 0 |
| 3. 基本財産繰入 | 100,000,000 | 0 | 100,000,000 |
| 支出合計 | 265,045,000 | 175,147,000 | 89,898,000 |
| 収入合計 | 278,296,000 | 183,407,000 | 94,889,000 |
| 収支差 | 13,251,000 | 8,260,000 | 4,991,000 |

News!

全国の映画館にてケア・インターナショナル ジャパンのCMが放映中

6月17日より全国の映画館にてケア・インターナショナル ジャパンのCMが放映中です。これは、劇場CMの専業広告代理店である株式会社 サンライズ社*にCAREの活動に共感いただき、全面的にご協力いただいたことによるもので、CM製作および配信に至るまでご支援いただきました。多大なるご協力にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。

設立から60年間、戦災の中でCAREパッケージを配布することから始まったCAREの活動は、今では、女性や子ども、災害や紛争の被災者など最も困難な状況に置かれている人々が本来持っている力を引き出し、自立して生きていく過程を支援する活動に変化・発展してきています。

CARE 60周年のテーマは、「女性のチカラ」です。貧困（1日1ドル以下）に暮らす10億以上の人々の75%が女性です。最も弱い立場にいる彼女たちは、必要な知識、ツール、機会さえあれば、自らの人生、そして子どもや夫、ひいてはコミュニティの人々の人生をも変える力を持つことができます。

今後、60周年の各種イベントやパブリシティ・キャンペーンを通して、CAREは女性の「生きるチカラを信じて支える」活動への参加を呼びかけていきます。その一つとして、今回の劇場CMを位置づけています。このCMは、株式会社 サンライズ社の全面的なご協力を得て、CAREの映像素材をもとに日本における劇場CM用に編集し、製作しなおしたものです。

なお、このCM製作に際しては、株式会社 キューン コミュニケーションズの皆様にもご助言・ご協力いただきました。なお、現在、CMが上映されている映画館の詳細については、ホームページに掲載中です。劇場にお越しの際には、ぜひCAREのCMをお見逃しなく！

*株式会社 サンライズ社 <http://www.snr.co.jp>

タイ「移動教育事業」 終了報告

ケア・インターナショナル ジャパン プログラムコーディネーター 犬飼 裕子

タイでは、1960年代からの急速な経済開発の結果、中央と地方、都市と農村の格差が広がり、この格差は教育にも現れています。教育事情の悪さが貧困とからみあい、子どもたちの学習意欲や学力不足などの問題が生じています。また、教師から生徒へのトップダウン方式、読み書き中心の伝統的な教授法により、子どもたちが積極的に発言したり、自ら考え、課題に取り組む姿勢が育ちにくい状況にあります。

移動教育事業は、東北タイのウボンラチャタニ県の中でもラオス国境に近い小・中学校20校の生徒、延べ3,000人を対象に実施しました。子どもたちが自ら問題解決できる力を身につけることを目的として、図書や教材を積んだ移動教育車を巡回させ、教師、青年ボランティア、村人との協力のもとに、子どもが主体となった総合的な学習活動を行いました。

この事業は、ケア フレンズ・東京の5周年記念事業として、2003年1月から3年の計画で始まり、2005年12月に終了しました。ご支援いただいた関係者の皆様にお礼申し上げます。ここで、この事業の3年間の活動について振り返り、終了報告をさせていただきます。

活動の展開

学校における活動は、対象校20校の生徒に対して、環境、健康、科学、美術など身近な事柄をテーマにした総合的な課外学習と読書を取り入れて実施しました。また、特に高学年を対象に、村の課題を話し合い、問題解決に向けたマッピング活動（村探索、村地図作成、課題調査、結果の発表）を導入しました。2年間の活動を終えた時点で、地域や学校ごとの取り組みに大きな差が見られたため、3年目は、モデル7学校を選定し、そこを拠点にして活動の成果が効果的に広がるようにしました。

その結果、各学校で、村における樹木の伐採問題をテーマにした人形劇の創作や読んだ本を紹介する放送活動、村人から伝統手工芸の技術を習得して制作する活動など、それぞれの学校や土地に合った発展的な活動が考案され、実施されました。また、全校において学校図書の貸し出しシステムを整備して新しい図書を購入すると同時に、読書感想文や手作り絵本の創作などの活動も導入されました。

一方、コミュニティにおいては、4箇所のモデル・コミュニティにボランティア宅を開放して図書室を設置し、子どもや村人に読書の機会を提供しました。また、調理実習や読書促進活動がボランティアにより企画され、実施されました。最終年度には、学校で行われてきたマッピング活動の延長として、子ども、教師、村人が集まり、村の課題について話し合う機会を設けました。参加者は、村の過去から現在を振り返ってその変化を再認識し、将来あるべき姿に近づけるための活動計画を考えました。そして、収入確保のための養殖魚・有機肥料作りや環境改善のためのゴミ箱・焼却炉の設置などの具体的な活動が実施されました。

成果と課題

事業終了にあたり、事業の評価活動を行いました。学校（教師）、コミュニティ（村人）、子どもたちのそれぞれについて評価項目を設定し、現地の教育コンサルタントと事業担当で学校訪問、インタビュー、教育イベントの観察などを実施し、調査を行いました。そして、ケア・インターナショナル ジャパンと現地事務所の教育チームで調査結果について検証し、この3年間の活動についての評価を行いました。成果としては以下の点が挙げられます。

・3年間の活動を通して、子どもたちの創造性が発揮され、自ら課題について考え、解答を導き出そうとする探究心が見られるようになった。さらに、コミュニティの課題に関する関心、参画意識、行動力の向上も見られ、友だちと協力して活動する能力も高まった。

・子どもたちを取り巻く環境の変化が見られた。教師たちは、子どもを中心とした参加型教授法のトレーニングを受け、教科に図書を使った調査活動やグループ活動を取り入れるなど、子どもたちが参画する授業を展開するようになった。

・青年ボランティアたちは、ファシリテーション・スキルなどのトレーニングを受け、将来の村のリーダーとして必要なことを身につけた。

・村人たちは、子どもたちの活動に一層理解を示して協力するようになり、子どもの力を一人前に見ようという意識の変化が見られた。また、コミュニティと学校との連携が促進された。

上記のような成果が見られた反面、学校における子ども主体の活動が一部の教師の主導で行われていること、コミュニティにおいて子どもが参加できる活動プログラムがまだ少ないこと、青年ボランティアが進学や就職で村を離れ、活動の継続が困難になるなどの課題が挙げられました。

そしてこれから…

これまでの活動を通して、コミュニティに継承されてきた知恵や技能が豊富にあり、村人が協力的であることがわかりました。子どもたちが主体的に考え、判断し、行動する力を引き出して、自ら問題解決するための「生きる力」を身につけるには、これらの豊かな資源を生かし、コミュニティの人々が一体となった息の長い活動を続けることが重要です。ケア・インターナショナル ジャパン

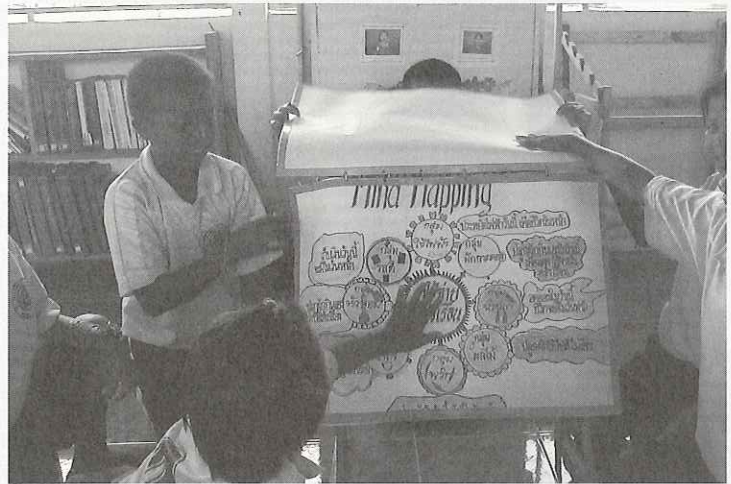
のタイにおける事業は終了しましたが、
 今後は、現地事務所が課題の解決に向

けて活動を発展させ、継続していく計
 画です。

～活動に参加した学校教師とのインタビューから～

「グループ作業で、村の支出状況についてマッピング活動により
 分析し、村世帯のサンプル調査を行った。その結果を分析し、
 貧困である原因と支出を削減する方法について検討。資源の再
 利用、共同利用、自給などの解決策を提案し、養殖魚・有機
 肥料作りや植樹などの活動を実践した。子どもたちには、積極
 的に発表する、グループ作業ができる、発想を広げられるなど
 の変化が見られた」

(バクチュム小学校教師・モデル校)



課題についての調査結果をまとめたチャート



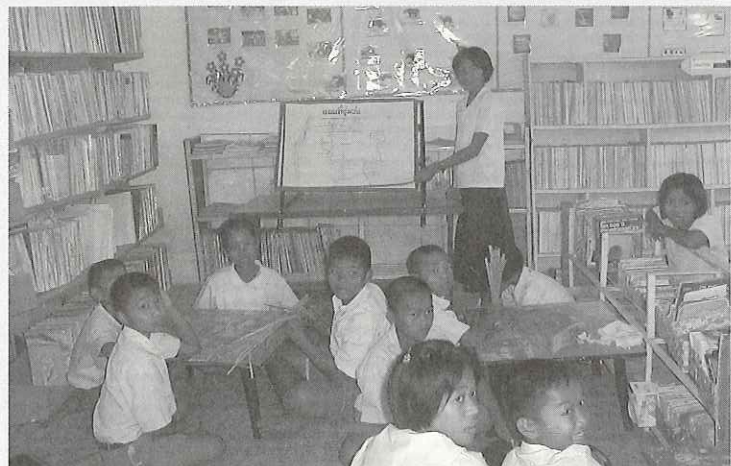
村における樹木の伐採問題をテーマに創作した人形劇

「教師トレーニングに小学校高学年・中学生が共に参加したこと
 から、子どもたちの発案で人形劇のクラブ活動が始まった。樹木
 の伐採問題をテーマにした人形劇を自作・自演し、タイの新聞、
 雑誌やTVで紹介された。また、活動をきっかけに、村人が学校
 に来て話をするようになり、教師は教科の枠をはずした総合的な
 授業を実施するようになった。活発に発表するようになった子ど
 もとあまり変化がみられない子どもが見られるが、家庭環境に問
 題があるので、そういう子どもに対しては家庭訪問を行ってい

きたい」
 (ファイサイ小中学校教師・モデル校)

「コミュニティに伝わる手工芸について、制作に必要な道具や
 資源、制作過程、効能などについてマッピング活動を行って
 調べ、まとめた。親や村人から技能を学び、実際に制作して、
 小遣いを獲得した子どももいる。約1年半をかけて、初期のピ
 リッジマッピングからここまでの活動に発展させた。子どもた
 ちの発想が、A→Bであったのが、A→A'→B→B'と広がり、
 大多数の子どもたちがより自由な発想ができるようになった」

(クムセンチャニー小学校教師・非モデル校)



村人から伝統手工芸の技能を習得して、かごやマットなどを制作

フィールド 最前線

ベトナム 「カントー橋建設に かかるHIV/AIDS 感染防止事業」

ケア・インターナショナル ジャパン
プログラムコーディネーター

犬飼 裕子

ベトナムの現状と事業実施の背景

ベトナムでは、1986年にドイモイ政策（計画経済から市場経済化に向けた新政策）を採択し、経済活動を効率化して投資環境を改善するために、民営化、規制緩和、経済・社会インフラ整備などの政策を進めてきました。日本政府は、ベトナムの経済構造改革を支援し、インフラ整備、地方間格差是正と貧困対策のための農村開発などを重点分野としてきました。カントー橋の建設は、2001年に円借款の契約が締結された事業の一つです。

カントー橋は、ベトナム南部ホーチミンから南西に160km、メコン河下流のデルタ地帯に位置しています。現在、フェリー輸送をしているこの地点に橋梁を建設することで、南部地域の物流を改善し、メコンデルタ地域の社会・経済発展に寄与することが期待されますが、これに付随する問題も発生します。その一つがHIV/AIDSをはじめとする性感染症の拡大です。

インフラ開発を行う際には、各地から多数の出稼ぎ建設労働者や移動労働者が雇われ、建設現場に一時的に滞在しますが、これらの人々を顧客とするさまざまなビジネスが繁盛します。ビジネスの中には性産業も含まれ、性感染症の拡大も懸念されます。建設工事によって生じる環境の変化が感染症拡大につ

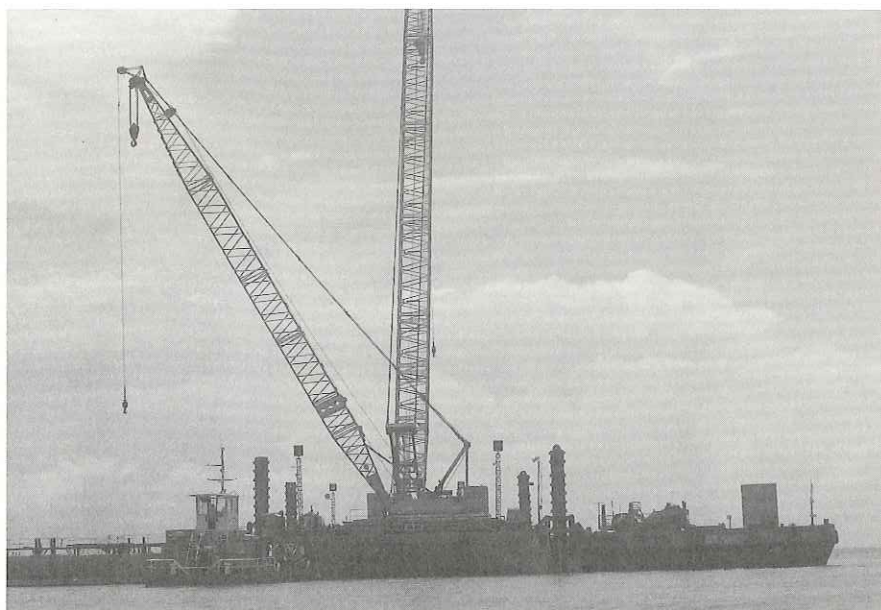
ながらないよう、労働者、性産業従事者、地域の人々などを対象としてHIV/AIDS感染防止の活動を行うことは、大規模インフラ開発にともなう問題を軽減するために必要不可欠です。

ケア・インターナショナル ジャパン（以下、CIJ）は、2002年に国際協力銀行から委託を受け、現地事務所と連携して、カントー橋建設にかかるHIV/AIDS感染防止に関する調査を実施しました。こういった実績に加え、CIJのHIV/AIDS分野における外務省やJICAの委託調査の経験および現地事務所の豊富な活動経験が、今回の事業実施に結びつきました。

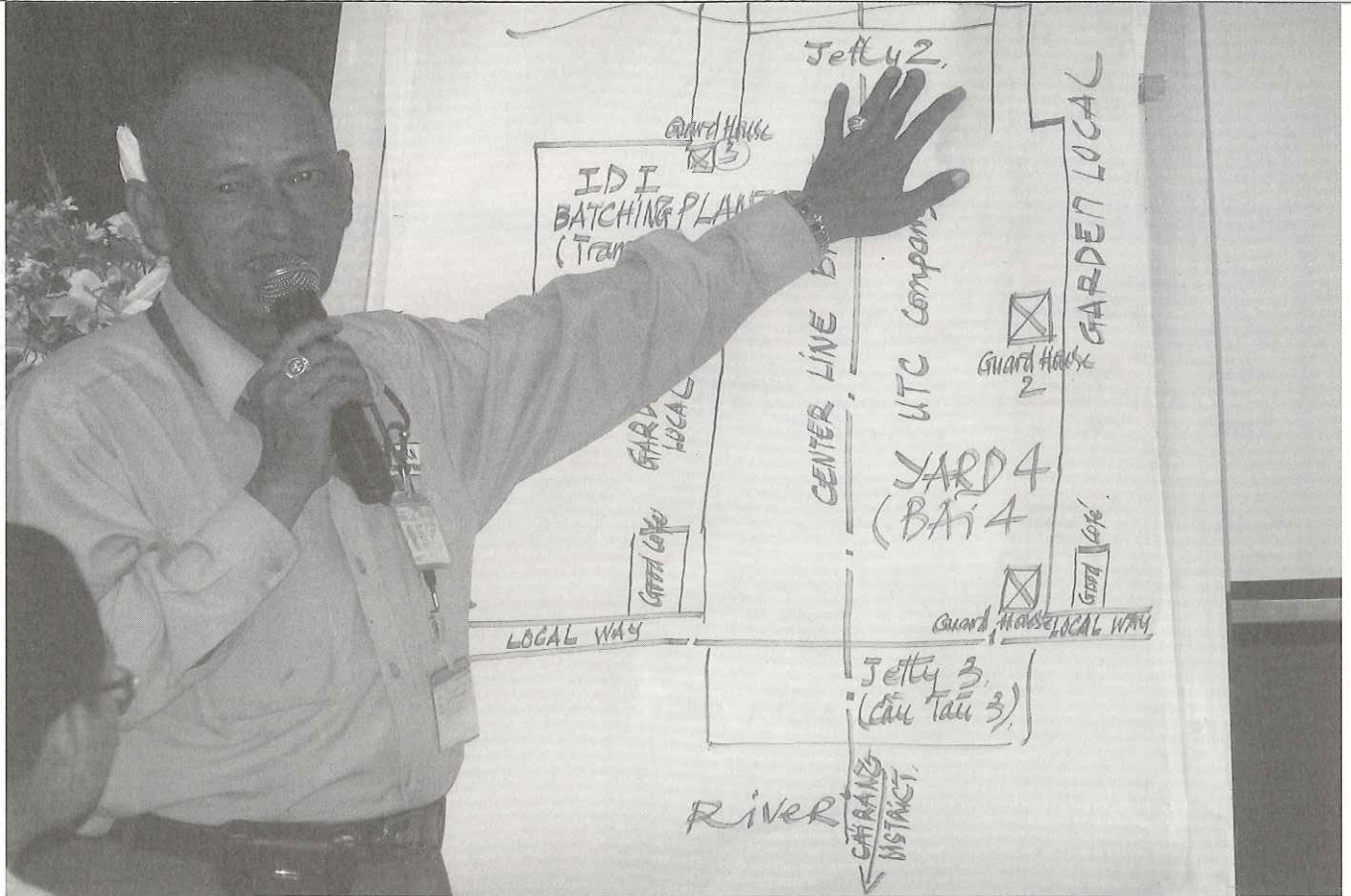
CIJは、ベトナム政府よりカントー橋の建設を受注した大成・鹿島・新日本製鐵コンソーシアムより、2006年2月から2年間の計画で、建設によって懸念されるHIV/AIDS感染を防止するための事業の委託を受けました。この事業では、以下のような活動を計画しています。

企業の健康管理者やクリニックの能力向上のための活動

企業で健康管理に従事する担当者やヘルス・クリニックが、出稼ぎ労働者などに対して適切な情報や支援を提供できるよう、能力の向上を目指します。具体的には、企業の担当者、感染防止に



カントー橋の建設現場



コミュニティのホット・スポット（カラオケ、ゲストハウスなど）について事業関係者に説明

携わっている政府関係者、ヘルス・クリニック関係者などを対象としたオリエンテーションを開催してHIV/AIDS感染症についての理解を促し、各担当者の役割と責任を明確にした活動計画を作成

します。また、現地のニーズに基づき、クリニック関係者にカウンセリングのスキル訓練を行います。

ム使用率を高めます。

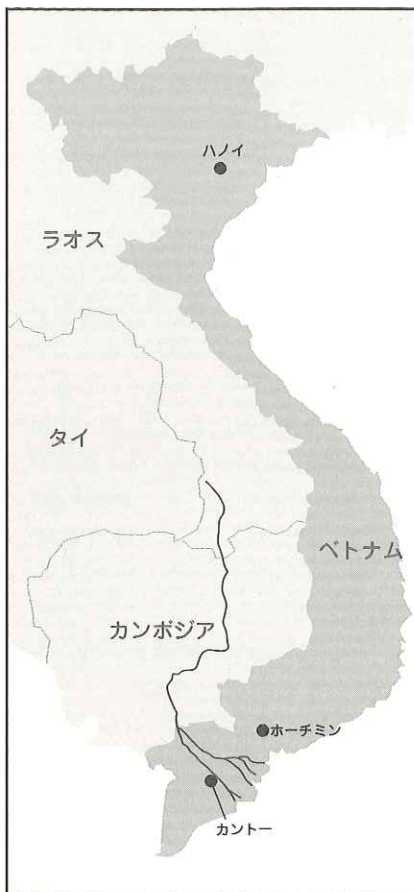
以上の活動以外に、HIV/AIDS感染防止、治療、ケア・サービスにおいて企業とコミュニティ間の連携を強化し、情報を共有する体制を築いていきます。

感染リスクの高い地区における情報提供・普及

まず、現地のHIV/AIDS感染リスク状況を把握するために、労働者や性産業従事者の人々の知識や行動習慣について調査を行います。それに基づき、リスク回避のための訓練やキャンペーンを実施し、建設現場など感染リスクの高い地区で感染を回避するための情報の提供と普及活動を行います。また、労働者や性産業従事者の中から、仲間に対して感染防止を働きかける人々（ピア・エデュケーター）を選び、コンドームの使用方法や安全な性交渉スキルの訓練を実施し、情報の普及につなげ、コンド-

今後の展開

インドシナ地域では、幹線道路や橋梁など大型のインフラ整備が進められています。インフラ工事による社会的な影響を十分に考えた対策がインフラ整備とあわせて組み込まれる必要があります。CAREが実施するこのHIV/AIDS感染防止事業が、開発の負の影響に効果的に対処できるよう、モデルケースとして確立させていく計画です。



■プロジェクト基本情報

- 期間： 2006年2月～2008年2月(2年間)
- 地域： ベトナム社会主義共和国 南部カンター市
- 対象者： 建設に関わる出稼ぎ・移動労働者、性産業従事者、コミュニティの人々など
- 資金提供者： 大成・鹿島・新日本製鐵のコンソーシアム
- 関係者： 建設に関わる民間企業スタッフ、地方政府関係者など
- 事業規模： US\$150,000 (1ドル=115円にて約17,250,000円)

企業とCAREのパートナーシップ

スターバックスと コーヒー生産地

CAREとのパートナーシップを通じての コーヒーCSR

スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社 広報室 室長 堀江 裕美



スターバックス コーヒー
ジャパン 株式会社
広報室 室長 堀江 裕美

「COFFEE CSR」の始まり

スターバックス コーヒーとCAREの出会い—
それは1989年アメリカでのこと。スターバックス コーヒーの店舗でCARE職員のひとりが偶然、「コーヒーの世界」というリーフレットを手に入れました。そして、CAREが支援活動を行う国々とスターバックスのコーヒー生産地がほぼ一致することに気づき、スターバックス取締役(当時)のデイブ・オルセンにコンタクトをとったのです。

それまでにほとんどのコーヒー生産地を訪れていたデイブは、「コーヒーの栽培農家を支援すれば、高品質なコーヒー豆の栽培を奨励できるとともに、その地域の経済支援にもつながる」と考えていました。1991年、コーヒー発祥の地とされるアフリカでCAREの活動をデイブが視察し、正式にCAREの支援を開始しました。この出会いこそが、スターバックス コーヒーがコーヒー生産地への貢献活動に取り組む最初のきっかけとなったのです。

スターバックスでは、生産地の環境・社会・経済すべてにおいて社会的責任を担いながら、高品質なコーヒー豆を生産し続けることができるように、オリジナルのガイドラインを設けています。生産者に対する経済面の援助や公正な取引を行い、お互いに利益がもたらされるような関係を築き、長期的な契約を結ぶことを推進しています。

お客様、パートナー(従業員)、そしてCAREとのパートナーシップに支えられたCSR活動

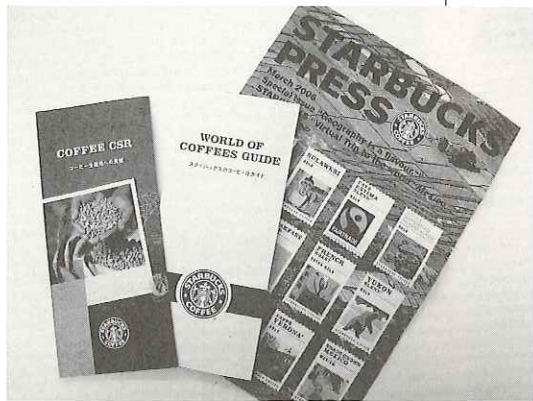
スターバックス コーヒーの生産地への貢献活動は、その後もCAREとのパートナーシップを通してエチオピア、グアテマラ、インドネシアそしてケニアと世界中に広がりました。またアンゴラ、ブルンジ、エルサルバド

ル、ホンデュラス、ニカラグア、インドなどでの度重なる天災でも、CAREを通して緊急支援を行いました。

2004年12月、甚大な被害を及ぼしたスマトラ沖地震を受け、スターバックス コーヒーは、スマトラ、スラウェシ、コモド ドラゴン ブレンド®などインドネシア産コーヒー豆の売上金の一部をCAREに寄付することを即座に決定。義援金は、インドネシアのアチェ州で、津波被災により仮設住宅や避難所での生活を余儀なくされた国内避難民20,000人を対象とした「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」の活動を通して、インドネシアの人々に還元されました。

また、日本においては、2005年4月4日から9月30日まで、一部を除く全国の店舗にて「イチロー・スターバックスカード」を販売。メジャーリーグ・ベースボール、シアトルマリナーズと協力し、1枚1,000円のプリペイドカードをご購入いただくたびに、200円が選定されたNGO/NPOに寄付されるという社会貢献プログラムを通じて、コーヒー生産地への貢献活動を行いました。お客様に趣旨をご理解いただき、販売枚数は合計143,535枚、そして寄付総額は28,707,000円となりました。寄付先の一つであるCAREを通じ、インドネシアでのマドゥーラ避難民の栄養と保健改善の支援を行うことができました。

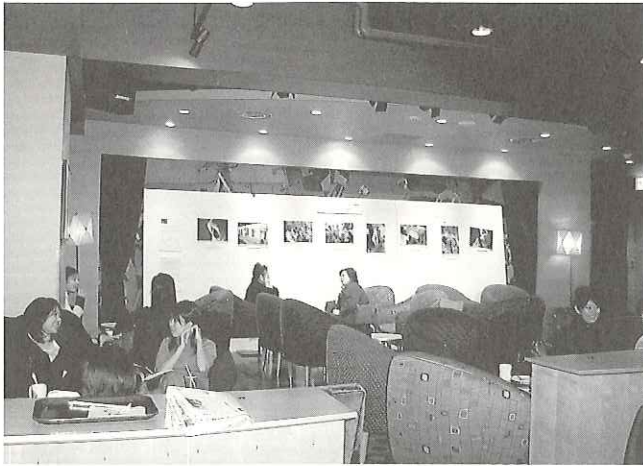
お客様へのご報告とコーヒー原産地への理解を深めていただくことを目的に、今年1月には東京・大阪の3店舗にて、「Help Make Children Smile写真展～子どもたちに笑顔を～」と題し、インドネシ



現在、全国の店舗にて「COFFEE CSR」など各種リーフレットを設置。1杯のコーヒーに秘められた物語をお楽しみください



「イチロー・スターバックスカード(写真右)」を通しての寄付先選定では、コーヒー生産地との関連に加え、団体の支援内容や期間、レポートシステム、社員参加の可能性などを評価



最も基本的なニーズも満たせない困難な状況の中、強く生きる子どもたちの笑顔を集めた「Help Make Children Smile写真展」



スマトラ沖津波1周年チャリティ写真展。多くの来場者がコーヒーを楽しみながら写真を鑑賞されていました

アでの支援風景を収めた写真展を開催しました。現在、弊社公式ホームページ (http://www.starbucks.co.jp/ja/csr/news/care_exhibition.htm) でも同写真展

をご覧ください。

おいしい一杯のコーヒーは、私たちを幸せな気分になしてくれます。その原点であるコーヒー豆を育てるのがコーヒー

生産地の人々。スターバックスは、コーヒー生産地の人々の暮らしが少しでも改善されるように、今後もさまざまな形で支援を続けていきます。

インドネシア

「マドゥーラ避難民の生活復興支援プロジェクト」

ケア・インターナショナル ジャパン プログラムコーディネーター 鈴木 幸子

当プロジェクトは、スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社が昨年実施した「イチョー・スターバックスカード」キャンペーンの売り上げ金の一部をご寄付いただき、実施されています。

プロジェクトの背景—忘れられた避難民たち

2001年に中央カリマンタンで発生した民族衝突（先住者・ダヤック民族対移住者・マドゥーラ民族）により、17万人にも上る主にマドゥーラ系の避難民が発生し、5年以上経つ今も、10万人以上が中央カリマンタンや先祖の地・マドゥーラ島の避難先にて、水やト

イレ、保健サービスなどへのアクセスが非常に限られた生活を余儀なくされています。民族衝突直後にはインドネシア国内外からの支援がありましたが、現在ではほとんど注目されず、当プロジェクトの事前調査の結果で、体力の弱い子どもをはじめとする避難民の健康状態の悪化が確認されました。

保健・栄養分野に関する問題点

長引く避難生活で、このプロジェクトの対象地域に住む人々は、保健・栄養に関するさまざまな問題を抱えています。帰還ができなくなるのではないかと懸念がある

ため、避難民の多くは、避難先に住民登録をしていません。未登録のままでは医療サービスが有料となり、多くの避難



プロジェクト基本情報

- 期間
2005年5月～2006年7月
(13カ月間)
- 地域
インドネシア共和国
東ジャワ州（マドゥーラ島）および
中央カリマンタン州（サンピット県）
- 対象者
民族対立により避難民となった約10,000世帯の
マドゥーラ系住民と避難民受け入れ地域の住民
- 資金提供者
スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社
- 連携機関
政府諸機関（保健省、開発企画庁など）、国際機関、現地NGO



マリアティさんはダヤック民族、夫のサンバンさんはマドゥーラ民族。紛争が起きる前までは民族間の結婚はめずらしくなく、民族の違いを意識することはなかったと言います。マリアティさんは、夫がマドゥーラ人だからという理由で夫と一緒にマドゥーラ島に逃げてきたのです
© Harsha De Silva

民は医療費を支払うことが困難な状況にあります。この結果、マラリア、皮膚病、下痢、気管支炎などの病気が頻繁に発生しており、特に体力・免疫力

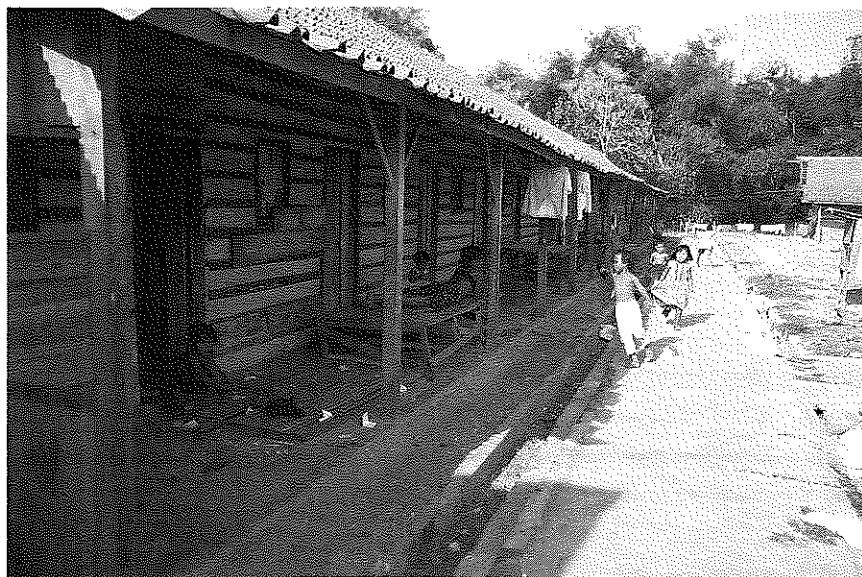
の弱い子ども、および妊婦や授乳期の母親に深刻な影響を及ぼします。

地域の特徴を生かした母子保健・栄養改善活動

上記の問題に対応するために、CAREではさまざまな活動を実施してきました。CAREでは、人々が自ら状況を改善する力をつけていくことが、プロジェクトの効果を持続的なものにする上で重要だと考えています。そこでこのプロジェクトでは、外部から新しいシステムを持ち込むよりも、既存のシステムを生かすよう配慮してきました。主な活動を以下にご報告します。

成長測定システムの機能回復

インドネシアには、「ポシャンドゥ」と呼ばれるコミュニティに密着した保健サービスを提供する施設があります。ここでは、妊婦や授乳期の母親、5歳未満児を対象に、成長測定を通じた保健サービスの提供が行われます。財政上の理由などにより、このプロジェクト対象地域では、ポシャンドゥにおける成長測定シ



民族衝突発生当初、政府が建設した長屋式の仮設住宅。5年以上経過し、老朽化している。避難民たちは、このような仮設住宅に住むか、親せきなどのもとに身を寄せるなどして生活している © Harsha De Silva

ステムがうまく機能していませんでした。CAREは現地の保健行政と協力して、5歳未満児が予防接種などの保健サービスを受けることができるようにするなど、およそ100箇所のポシャンドゥの機能を回復させました。

望ましい生活習慣を持つ世帯調査

この調査では、育児（食事習慣、抱き方、衛生習慣など）についてどのよう

に考えているか、保護者に聞き取りを実施しました。この調査の目的は、貧しい状況にあるにもかかわらず子どもを健康に養える世帯を調べた上で、彼らの食事習慣を参考にし、容易に入手可能な地元の食材で子どもの栄養状態に良い影響を与えるメニューを作成することです。調査後は、母親を対象とした約50回もの栄養講習を通して望ましい生活習慣の普及を行いました。栄養失調の子どもを持つ世帯の食生活は、米やキャッサバなど炭水化物に偏りがちですが、講習を受けた母親たちは、地元でも安価で手に入る豆などをメニューに取り入れ、たんぱく質も摂取することに配慮するようになりました。

CAREでは、既存のシステムや地域の特徴を生かした、効率的かつ効果的な活動を行っています。また、CAREの支援終了後も、地域の人々が継続して活動していくことができるよう、これらの活動は、CAREの実施した技能トレーニングを受けたコミュニティのボランティアたちによって支えられています。プロジェクト終了後は、これらのボランティアや現地の保健行政が活動を引き継いでいくことになります。



月1回の成長測定の日、コミュニティの保健施設を訪れる母子たち。体重測定や予防接種、栄養補助食の配布が行われる © Harsha De Silva

私スタイルのCAREライフ

My valuable insights into the world of CARE ~"CARE World"に入ってみて

ケア・インターナショナル ジャパン ボランティア クレア フォーマン Claire Foreman



Having worked in translation and taught English on the JET Programme, I was ready to broaden my horizons. I went in search of NGO volunteer opportunities last summer and came across CARE International Japan. I was really pleased to receive a quick and friendly response and was very happy to help out at the Global Festa last year.

The two days I spent with CIJ staff and volunteers at the festival booth filled me with inspiration and increased my desire to further support CIJ and learn more about their vital project work throughout Asia.

My next encounter with CIJ was when I helped translate a proposal for the After TEA project in Sri Lanka. Soon after I was pleased to have the chance to attend a presentation in Harajuku by Cader, the Sri Lankan TEA project staff member featured in the last newsletter. The evening was very interesting and brought the whole project to life for me. Wishing to further understand the behind the scenes work of CIJ I asked to spend time alongside the staff.

I have now just completed two months of volunteering at the office. My time there included supporting the Photo Tapestry Activity, researching fundraising ideas, selling Asian goods at a charity event and translating JICA documents. I am really hoping that with the future launch of CIJ's English web pages that more foreigners will take up the great

opportunity to not only learn about CIJ but also to support and have fun raising money for CIJ projects. My time with CIJ taught me a lot and I am really hoping to put everything I have learnt and experienced with CIJ to good use in my future career.



昨年10月の「グローバル・フェスタJAPAN2005」にてCAREスタッフ、ボランティアさんと

翻訳やJETプログラムでの英語教師などの仕事を経て、さらに視野を広げたいと感じていた頃でした。NGOでボランティア活動をする機会を探していた去年の夏、ケア・インターナショナル ジャパンと出会いました。問い合わせに対して迅速でとても親切な返答をもらい、昨年のグローバルフェスタにてCAREの活動に参加できることになり、とても嬉しく思いました。

グローバルフェスタのCAREブースで、スタッフやボランティアさんたちと共に過ごした2日間。このときの体験に触発され、ケア・インターナショナル ジャパンがアジアにおいて実施している素晴らしい活動についてさらに学び、今後も応援し続けていきたい、という気持ちが高まりました。



それから再度、CAREの活動に関わることになったのは、スリランカにおいて「After TEA プロジェクト」を実施するための申請書を翻訳する業務においてです。翻訳作業を始めてからまもない頃、幸いにも、前回のニュースレターで紹介されたスリランカ人のTEAプロジェクトスタッフ、Caderさんによる報告会に参加する機会もありました。報告会はとても興味深く、プロジェクト全体がよく理解できて、身近に感じられました。CIJの活動のもっと深い部分をさらに知りたいと思い、私は、スタッフのそばで働くことを希望しました。

そして今、2カ月間の事務局でのボランティア活動をちょうど終えたところです。この2カ月間、事務局で私が行ってきたことは、スリランカにおける「フォト・タペストリー・アクティビティ」関連業務、ファンドレージング手法に関する調査、チャリティーバザーにおける民芸品の販売、JICA提出書類の翻訳など、多岐にわたりました。将来、ケア・インターナショナル ジャパンの英語のホームページを立ち上げることにより、もっと多くの外国人がこの団体について知るすばらしい機会を得るだけでなく、楽しみながらプロジェクト実施のための資金集めの部分でサポートしてあげたい、と思います。CAREで過ごした時間の中で、私は本当に多くのことを学びました。ここで学んだこと、経験したことすべてを、今後の私の人生において役立てていきたいと思っています。



事務局近くのおいしい和食屋さんでの歓迎会にて

Our Supporters

*このページへの会員および寄付金協力者のお名前掲載について、前回、実施したアンケートに寄せられたご意見を考慮し、次号以降の掲載について事務局にて検討させていただきたく思いますので、どうぞご理解・ご了承いただければ幸いです。

会員、寄付金協力者紹介

(2006年3月1日～2006年5月31日)

(敬称略・50音順)

みなさまの温かいご支援に事務局スタッフ一同、心よりお礼申し上げます。

●個人賛助会員

(新規)

大山 廉平
佐々木 美晴
村上 眞樹
渡辺 京子

●個人準賛助会員

(新規)

甲斐 正三
長尾 とみ子

●パッケージ会員

(継続)

天羽 節子
飯田 多美
石黒 秀彦
市川 直子
泉 聡司
伊東 直
香取 昭
刈谷 敏久
河本 泰行
庚 珍化
菊地 恵美子
近藤 春恵
酒井 恵美
酒井 健
桜井 純子
瀬尾 佳伸
竹内 智之
成瀬 富美子
鳩山 由紀夫
水谷 素彦
安則 和子

●法人会員(継続)

(財)国際協力推進協会
(株)損保ジャパン
東京海上日動火災
保険(株)
(有)西片企画
(株)丸和

●個人賛助会員

(継続)

赤坂 彰夫・秀子
浅野 俊弘
渥美 伊都子
有馬 富美子
井上 恵美子
井上 勝六
岩井 昭
岩村 浩司
小川 朝子
金田 平夫
川口 順子
北川 曉子
木村 正博
黒田 則子
佐伯 継一郎
澤田 乃輔
田中 久生・純子
塚原 国男
葛籠 克己
中島 清美
中野 紀美代
野口 千歳
羽田 英彦
降旗 健人
堀田 若葉
松下一弘
御巫 望子
峯岸 和永
三輪 長正
諸井 政昭
矢吹 真人
横田 恵
横田 謙

●個人準賛助会員

(継続)

金子 智子
東 未子
藤本 たみ子
内田 三美

●寄付金協力者

家出 清章
井上 仁
大窪 美由紀
太田 清蔵
大谷 清子
岡島 古樹
小川 糸み
落合 唯夫
柏木 昭子
加藤 睦子
亀田 洋一
唐澤 節子
菊池 フミ
木下 ひで子
後藤 義孝
小林 憑二郎
小林 立
酒井 健
佐々木 美晴
椎名 秀子
Sina Yazdani
高橋 梨絵
武田 恭子
ドウトレイ・ジャック
長尾 幸一
難波 嗣朗
西山 裕美
野村 健太郎
三島 弘子
諸井 政昭
柳田 順達
山崎 博子
山崎 政純
山下 仁
山城 浩三

アジア婦人友好会
管楽器専門店ミュー
ジカルヒロ
ケア フレンズ岡山
ケア フレンズ・東京
仙台市立台原中学校

中外製薬労働組合
ほけっと基金
花鶴小学校 6年
(株)ビジネス社

●春募金協力者

青木 幹多
青柳 一博
青柳 萬亀子
青山 歌子
朝岡 みよ
安倍 泰子
安部 洋子
池 淳一
石井 英一
石川 正久
石原 一子
石森 菊江
石渡 咲子
伊東 直
伊藤 由里子
稲川 素子
今村 達男
岩井 清満
岩崎 祥一
上杉 昇治
植田 東子
上野 俊子
植之原 道行
魚本 秀
内ヶ島 敏博
宇野 昭二
生川 カズ子
生川 洋晴
大江 佐知子
太田 悟子
太田 清蔵
大西 道生
大庭 光義
大羽 きよ
大山 廉平
岡崎 二三
岡田 安弘

尾形 孝
岡村 秀美
小川 糸み
小川 ひとみ
奥田 佳子
織田 孝幸
小田 泰子
柿沼 寛
影山 光太郎
笠井 浩史
笠松 真理子
数原 孝憲
柏森 香奈
加藤 郁子
金子 淑恵
金城 弘明
金田 平夫
上坂 千代
神澤 清
亀井 信子
河中 三重子
木村 欣二
草川 益美
楠元 優
久保田 浩司
小井土 喜代子
黄金井 達夫
古高 健司
後藤 博子
後藤 義孝
小畑 祐悌
小林 立
小林 淳子
小武家 暁子
小堀 宗武
小宮 初雄
是枝 隆定
斉藤 孝一
斉藤 直身
斉藤 由美
Simonsen Andreas
佐伯 佳代
榊原 五子

佐々木 友子
佐々木 美晴
佐渡 弘・ユリ子
佐藤 賢司
佐藤 健治
佐藤 貞三
佐藤 妙子
佐藤 英恵
澤田 乃輔
鹿野 好子
渋沢 厚美
清水 ヒサ子
庄司 慈明
白髭 真理子
新保 敦子
杉村 朗
鈴木 やすよ
鈴木 政夫
鈴木 靖郎
諏訪 孝
関 賢純
千 宗室
平和代
高島 倫子
高瀬 覚照
高橋 一夫
高橋 裕子
高橋 良郎
武川 節
竹腰 郁代
武田 恭子
多田 喜久子
太刀掛 侑子
立石 尚史
田中 美代子
谷口 清超
堤 功一
坪谷 敦子
鶴藪 禮子
寺岡 紀美子
戸井田 文枝
ドウトレイ 昌子
豊田 仁美
長尾 とみ子
中川 健一・久美子
中島 千代子
長嶋 久子
中谷 庄八



中西 淳子
 中野 喜久子
 中野 紀美代
 永野 京子
 中村 歌
 中村 光子
 永山 治
 奈良 耕作
 成川 豊樹
 難波 嗣朗
 西村 淳子
 荻澤 嘉雄
 野口 東
 野口 シズ
 野口 千歳
 野口 晏男
 野田 幸裕
 野村 健太郎
 橋口 日出夫
 羽田 英彦
 鳩山 安子
 原 禮之助
 東 末子
 樋口 晃子
 平林 薫
 藤岡 卓雄
 藤沢 葉子
 藤沼 和敏
 藤保 惟通
 降旗 健人
 堀田 シナ
 本田 享道
 本田 早苗
 前勝 和代
 松浦 葉子
 松下一弘
 松田 茂之
 松葉 芳子
 御木本 澄子
 三島 弘子
 水島 雅子
 水野 利哉
 三井 達彦
 満島 フミ
 宮川 武夫
 宮下 恵子
 宮原 純
 廣田 美代子
 村上 眞樹

村上 悦雄
 村松 寅三郎
 森 時子
 森脇 道子
 諸岡 孝昭
 矢沢 歌子
 柳田 順達
 山内 久子
 山崎 勝之
 山田 清一
 山中 康平
 山本 美和子
 横田 笑
 横田 謙
 横山 欽二
 横山 幸子
 横山 富美子
 吉田 正二
 吉田 正美
 吉田 紀子
 吉原 幸一郎
 吉満 博
 吉村 精仁
 吉村 有子
 和田 寛
 和田 洋
 渡辺 忍み子
 渡辺 京子
 渡辺 省三
 金岡紙工
 (特活) 環境アリーナ
 研究機構

●レインボー基金
 協力者(2005年度)

秋山 純子
 有馬 イサ
 犬飼 星斗
 今村 有一・紀子
 海谷 優子
 尾上 恵子
 梶本 宗代
 川上 美代子
 佐藤 タカ子
 品村 尚武
 Sina Yazdani
 杉田 直美
 竹下 ゆかり

網田 厚子
 富樫 成子
 徳永 博
 中川 健
 永島 有二・野村 克也
 花房 郁子
 西山 裕美
 藤岡 卓雄
 前田 克治
 右田 志登美
 椋本 麻衣子
 山内 さかえ
 山本 明美
 与座 淳
 脇田 富美子
 青藍泰斗高等学校
 公孫会新潟支部
 大阪市立大府西中
 学校
 鎌倉雪ノ下郵便局
 (特活) 環境アリー
 ナ研究機構
 国際ソロプチミスト
 飯塚一嘉穂
 仙台栗生郵便局
 高松キワニスクラブ
 (特活) パブリック
 リソースセンター
 福岡キワニスクラブ
 和歌山キワニス・ク
 ラブ
 Think the Earthプ
 ロジェクト

●スマトラ沖地震
 による津波復興
 募金協力者

宇田 政史
 大場 敦子
 小倉 サエ
 河津 悦子
 黒澤 則子
 川上 明枝
 佐藤 史朗
 島田 昭男
 辻内 浩
 戸川 幹夫
 鳥沢 孝子

野田 とも子
 バチエスターリング
 藤田 寿雄
 藤巻 喜代子
 間宮 照子
 山崎 博子
 山下 純子
 山下 美明
 大園小学校5年募金
 グループ
 ケア・サポーターズ
 クラブ熊本
 ジロン自動車
 東京都立江北高校
 4年A組
 長府駅前郵便局
 練馬区立第二小学校
 坊ちゃん食堂(まごころ)

●パキスタン地震
 緊急募金協力者

岸本 二三男
 後藤 紀久子
 末吉 由佳
 仲根 栄次
 増田 源一
 山田 キエ子
 脇 慎一郎
 妻ヶ丘協会 シオン会
 松阪市立第三小学
 校5年生

●ジャワ地震
 緊急募金協力者

小泉 英治朗
 西井 真理子
 松田 満子
 湯川 夏樹
 吉田 安広・紀子
 横山 勇



CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.3
2006年6月30日発行 (季刊)
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel : 03-5950-1335
Fax : 03-5950-1375
E-mail : info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE Notice Board

「CSRシンポジウム」開催！ NGOと企業の新しいパートナーシップ構築に向けて

近年、日本においても「企業の社会的責任（CSR：Corporate Social Responsibility）」や企業の社会貢献の重要性が認識され、企業がより密接に社会（市民社会・地域社会・国際社会）と関わりをもつことが求められています。他方、貧困の根源的な解決をめざすNGOとしては、ビジョンを達成するために、途上国において経済・社会的に大きな影響力をもち、また先進国で多くの消費者・顧客を抱えるグローバルな企業と連携することは不可欠となってきています。

そこで来たる9月、ケア・インターナショナル ジャパンは、東京都内にて「企業と社会の新しいパートナーシップに向けて—社会的ブランド価値を高めるための協働戦略とは—」と題し、CSRシンポジウムを開催します。

CSR分野における海外のケーススタディの紹介、日本における実例、またCSRの戦略的な位置づけなどについて、講演やパネルディスカッション形式で紹介・議論する予定です。

設立60周年を迎えるCAREの新しい取り組みに、是非ご期待ください！

※一部変更する場合もございますので、ご了承ください。最新情報について当財団ホームページ (<http://www.careintjp.org>) をご確認ください。

S I X T Y



Y E A R S

* 皆様のご意見をお寄せください。

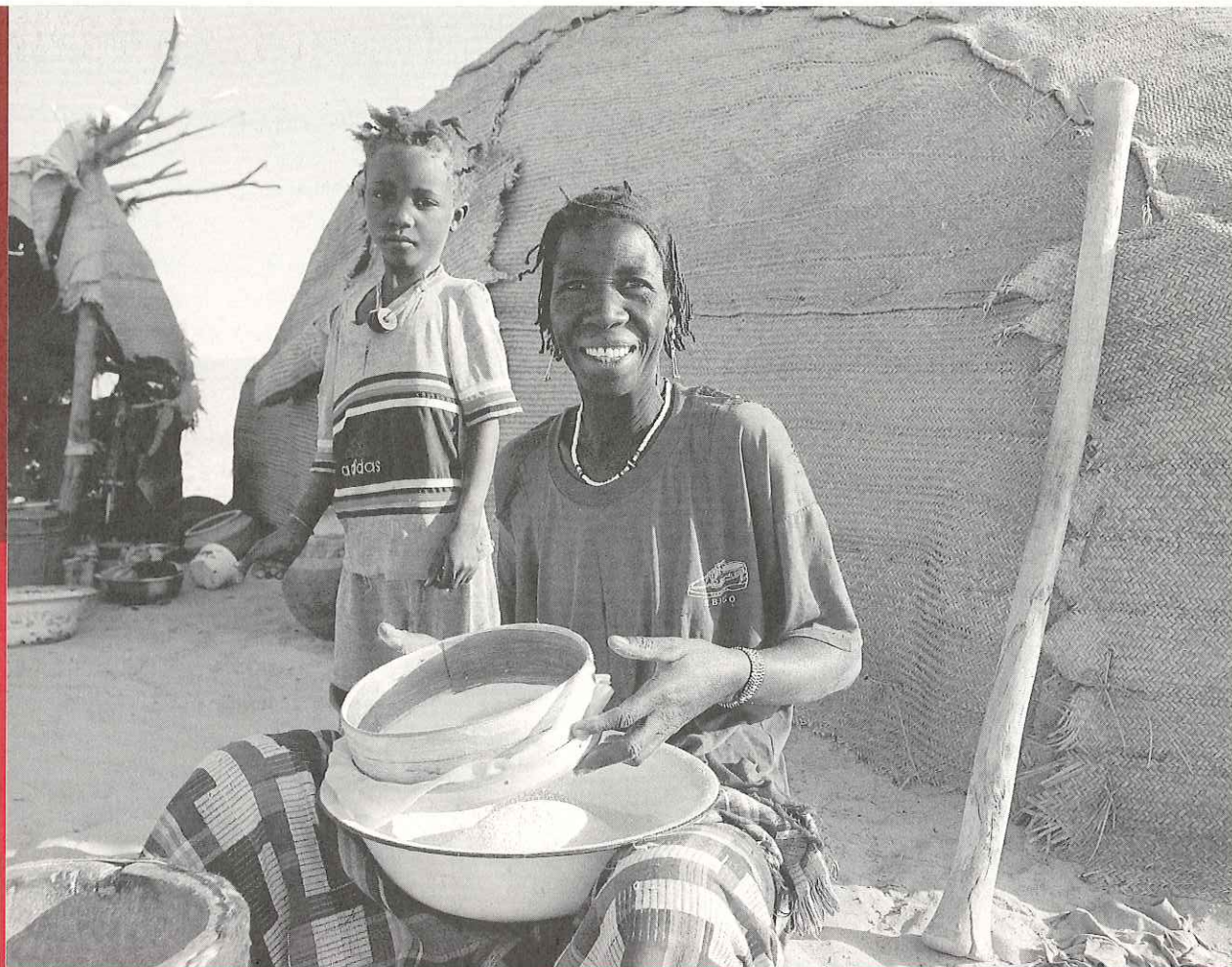
CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、ご感想などは、CARE World誌面上にてご紹介させていただきます。また、「ケアの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に「CARE World」を広げていきたいと思っております。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしております！

CARE World

Vol. **2** ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
March 2006

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国以上で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。



CARE World Vol. 2

Contents



- page 3 **スリランカ通信**
ケア・スリランカ ヌワラエリヤ事務所駐在
TEAプロジェクト プロジェクトマネージャー 栗原俊輔



- page 4 **スペシャルレポート スマトラ沖津波1周年企画 チャリティ写真展**
「スマトラ沖津波から1年 -生きるチカラ、復興への鍵-」 報告
ケア・インターナショナル ジャパン
マーケティング部ファンドレージング担当 高木 美代子



- page 8 **フィールド最前線 スマトラ沖津波復興支援事業**
・スリランカ「学校における子どもの心のケアプロジェクト」 報告
ケア・インターナショナル ジャパン 事業コーディネーター 草川 町子
・インドネシア「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」 報告
ケア・インターナショナル ジャパン 事業コーディネーター 鈴木 幸子

- page 10 **スリランカ人スタッフ 日本活動レポート**

- page 12 **私スタイルのCAREライフ**
ケア・インターナショナル ジャパン デザインボランティア 佐藤 よし子

- page 13 **Our Supporters** ~会員、寄付金協力者紹介

- page 16 **CARE Notice Board**

スリランカ通信

ケア・スリランカ ヌワラエリヤ事務所駐在
TEAプロジェクト* プロジェクトマネージャー 栗原 俊輔

*TEAプロジェクトについては本誌10ページに概要
が掲載されています。

2006年1月23日 (月)

☀️ 快晴

今日は久しぶりの快晴。外は上着なしに歩けるくらいだ。ヌワラエリヤはスリランカという南国に位置しながら年間平均気温が12度前後と非常に低い。これはヌワラエリヤが標高2,100メートルという高地に位置しているからである。2000メートル超というのは富士山の5合目くらいである。日本ではそんな高地には誰も住んでいない。スリランカが赤道近い南国なので、この標高でこの気温なのだろう。

スリランカの中でも珍しい気候および地勢のヌワラエリヤ。当然スリランカ人のあいだでも避暑地として人気である。この街はイギリス植民地時代に開拓された。それまではほとんど誰も住んでいなかった。今でも街の建物などはイギリス時代のもが多く、リトル・イングランドという別名もあるくらいだ。気候も当然その名前の由来に一役買っている。

スリランカは北海道より一回り小さく、九州より少々大きいという大きさの島である。これほど小さな南洋の島に、ヌワラエリヤのような年中涼しい場所があることはスリランカ人の誇りでもある。この街を訪問するには4月が一番過ごしやすい季節である。この時期はシンハラ・タミル正月でもあり、スリランカは連休になる。そしてコロンプやキャンディをはじめとしてスリランカ各地からヌワラエリヤを目指して多くの観光客がやって来る。4月のヌワラエリヤは花の季節でもあるが、ヌワラエリヤがスリランカのほかの場所と違うのは花の種類も然りで、街の中心部に位置するビクトリア・パークはバラが満開になる。椰子の木などは街中どこを見渡しても見つからない。そんな植生の違いも脱日常へと導いてくれる。

このヌワラエリヤの特殊な気候と地勢



美しい紅茶農園の景色。しかし居住者たちの生活は実に厳しい(著者、写真左)



誕生日にスタッフからプレゼント。紅茶農園での日常業務を忘れ、ほっとできるひととき

CAREの実施するTEAプロジェクトにおいて、農園居住者の社会サービスへのアクセス改善に向けた取り組みの1つとして、インフォメーション・センターを開設。写真は、その開所式での一コマ



を一番に生かしたものがお茶である。この微妙な気候と（日本でも年間平均気温が12度などという街は存在しない）年間を通じて適度に保たれている湿度と霧がお茶の生育、香り付けに最適だという。スリランカのどの街からヌワラエリヤに来るにしても、最後の2時間はひたすらお茶畑の中。天気の良い日などは一面が緑のじゅうたんのよう美しく映える。道行くお茶摘みの女性たちも、外国人、スリランカ人を問わず旅の気分を高揚させてくれる。

スリランカといえばセイロン・ティーが有名である。なかにはいまだにスリランカというよりはセイロンと言ったほうが通じやすい場合もあるくらい、セイロン＝お茶という印象が世界中の人々に浸透している。これはヌワラエリヤをはじめとする、スリランカの高原地帯の気候がいに紅茶生育に合っており、また質の高いお茶を生産し、人々に愛飲されているかを証明するものである。そしてお茶摘みの女性を眺めながら、ヌワラエリヤにたどり着くまでの道のりで、本

場セイロン・ティーへの期待が膨らむ。

しかし、私たちはあまりにも知らなさすぎる。この広大な緑のじゅうたんの影に隠れたさまざまな問題があることに。いつも笑顔を絶やさずお茶摘みをしている女性たち。彼女らは、摘んだお茶がどこで、誰に飲まれているか知っているのだろうか？彼女らは、自分たちが摘んだお茶が自分たちの日給以上の付加価値を生み、莫大な利益をスリランカはもとよりイギリスその他の紅茶業界に生み出していることを知っているのだろうか？そして、彼女たちは自分たちがなぜほかのスリランカ人から差別されているのか、なぜ生まれてから疑問もなくお茶摘みの労働者として従事しているか、知っているのだろうか？

こんな快晴のすがすがしいヌワラエリヤは、この街に住むタミル系お茶畑住民の抱えるさまざまな問題も一瞬忘れさせてくれる。が、私たちはここヌワラエリヤから問題を外へ向けて発信していかなければいけない、と小春日和の午後に思うのであった。

特集 Special Report

スマトラ沖津波1周年企画

チャリティ写真展

「スマトラ沖津波から1年

—生きるチカラ、復興への鍵— 報告

ケア・インターナショナル ジャパン マーケティング部ファンドレージング担当 高木 美代子



銀座のマロニエ通りから少し道を入ったところに位置するギャラリー青羅

ケア・インターナショナル ジャパンは、スマトラ沖地震・津波の発生から丸1年を迎える節目にあたり、2005年12月25日から29日の5日間にわたり、ギャラリー青羅（東京都中央区銀座3-10-19 美術会館1F）にて、チャリティ写真展「スマトラ沖津波から1年—生きるチカラ、復興への鍵—」を開催しました。

津波発生を機に広がる CARE支援者・協力者の輪

写真展の開催は、多くの皆さまのご理解とご協力がなければ成しえなかったものです。写真展の趣旨にご賛同いただき、大変貴重な写真を快くご提供くださいましたハーシャダシルバ氏、また無償でギャラリーを提供してくださった

美術会館様をはじめ、後援や協賛、また広報面などでご協力いただいたスポンサーの皆さまなど、開催にあたっては本当に多くの皆さまにご支援いただきました。

また開催中は晴天に恵まれ、年の瀬の多忙な時期にもかかわらず、延べ182名もの皆さまにご来場いただくとともに、学生や社会人など、20名を超えるボランティアの皆さまにもご協力いただきました。この場をお借りして、心より感謝、お礼申し上げます。

ハーシャダシルバ氏による 写真37枚を展示

写真展では、スリランカで自身が津波に遭遇した写真家ハーシャダシルバ氏がとらえた津波発生直後の被災状況に加え、当財団が現地CAREと協力して実施する2つのスマトラ沖津波復興支援事業（「国内避難民のための水と衛生プロジェクト（インドネシア）」と「学校における子どもの心のケアプロジェクト（スリランカ）」）*の現場において、復興に懸命に取り組む人々の姿や子どもたちの笑顔など、計37枚にも及ぶ写真を一挙公開しました。

そこには決して無力感や悲壮感漂う人々の姿ではなく、自然の猛威に全力で立ち向かい、自らの力で生活を立て直そうとするまさに「生きるチカラ」に満ち溢れた姿が、1枚1枚の写真として切り取られており、多くの方に共感いただ



25日のクリスマスパーティーにて。来場者の方々には、スリランカのお菓子などを食べながら、なごやかに話をして情報交換したり、交流を深めていただきました

きました。

*スマトラ沖津波復興支援事業については、本誌8、9ページの「フィールド最前線」をご覧ください。

「生きるチカラ」を支える CAREの事業報告

ギャラリーでは、被災現場の状況報告とともにスマトラ沖津波復興支援事業の事業報告会も行いました。12月25日は「あの時、そして今—始まったばかりの復興」と題して事務局長が講演。一般の参加者に加え、NHKやフジテレビからの取材を受けるなど、マスコミからも反響をいただきました。

27日と28日の両日には、事業担当者がインドネシア、スリランカそれぞれの現場や事業実施風景の写真を紹介しながら、事業の概要をはじめ、成果や課題、また今後の展望について報告しました。また、25日のクリスマスパーティーでは、それぞれの国の歴史や文化、そして政治的背景などを三択のクイズ形式でひも解きながら、現地の課題やCAREの事業理解に欠かせない基本的な事柄について、楽しみながら理解を深めていただきました。

多くの方々と共に迎えた 津波1周年の日

ちょうど津波から丸1年の日である26日には、チャリティワインパーティーを開催し、会員の皆さまをはじめ、日頃よりご支援いただいております支援グループや企業担当者など、70名を超える方々にお越しいただきました。ギャラリーは、津波1周年を記念して、スリランカで作られた特別なキャンドルがともされ、昼間の雰囲気とは一転、とても幻想的で温かいムードに包まれました。

当財団の和久本会長による挨拶と黙とうで厳粛に始まり、その後、駐日インドネシア大使 アブドゥル イルサン氏と



クリスマスパーティーにて。クイズを通して、津波復興支援事業を実施しているスリランカとインドネシアの事業内容や文化を紹介



事業担当スタッフからスリランカについてのクイズ。皆さん、真剣に考えながら楽しんでくださったようです



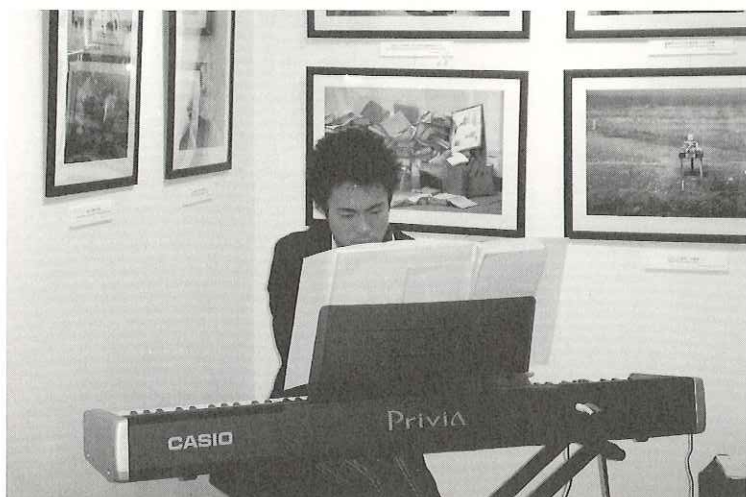
27日のインドネシアにおける復興支援事業報告会にて、報告を行う事業担当スタッフ



26日のチャリティワインパーティーにてスピーチをされる
駐日インドネシア大使のアブドゥル イルサン氏



チャリティワインパーティーにて。会員の方など多くの方々にご来場いただきました



ワインパーティーは、ピアニストの鳴海周平さんのご協力によりとても素敵な雰囲気

ケア フレンズ・東京 安倍洋子会長によるスピーチをいただきました。およそ2時間の間、当時の被災状況や現地の活動に思いをはせながら、写真をご覧いただいたり、ピアノ生演奏を聴きながらワインやスリランカのお菓子を楽しまれたり、会場は参加者の熱気で包まれました。

チャリティ・オークション参加を通しての事業支援

写真家ハーシャ ダシルバ氏のご協力を得て、チャリティワインパーティーの後半には、当財団としては初めての試みであるチャリティ・オークションも開催しました。(株)イースクエア代表取締役会長木内 孝氏の進行のもと、事務局長が現地の状況やストーリーなどを織り交ぜながら1枚1枚丁寧に写真を紹介し、その結果、予想を上回る15枚の写真を落札いただきました。

また、写真オークションに加え、写真展開催中、当財団関口理事長提供によるワインとシャンパンのサイレント・オークションも開催しました。皆さまのご参加に心より感謝いたします。

ご寄付349,257円を「スマトラ沖津波復興支援事業」に活用

写真展開催中、受付やギャラリー内に募金箱を設置し、寄付のご協力をお願いしました。

またCAREロゴが入ったトレーナーやマグカップなどオリジナルグッズをはじめ、株式会社 生活の木様、スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社様など協賛企業からの提供商品、インドネシアおよびスリランカの民芸品、またボランティアの皆さんお手製のケーキ等の物品販売を行いました。中でも、急ぎよ、写真展のためにスリランカから取り寄せたクリスマス限定のミニケーキは、その真っ赤な包装とお手ごろな価格で、大

大変人気をいただきました。

オークションへのご参加に加え、募金箱への寄付や物品の購入を通していただきましたご寄付は、スマトラ沖津波復興支援事業を通して有効に活用させていただきます。

おわりに

津波発生直後に比べ、日本では関連ニュースがほとんど取り上げられていなかった中、記帳用のノートに残されていたメッセージがとても印象的でした。

「このような援助や途上国の問題は、知ろうとしなければ、知らずに終わってしまいます。(中略)世界の人々は共生しているので、途上国の問題は私たちにとって深く関わることだと思います。(都内大学生)」



写真家ハーシャダシルバ氏(写真、左)。今回のチャリティ写真展のために合計37枚の写真を提供



チャリティワインパーティーでの展示写真のオークションの様子。
当財団事務局長(写真、右)が現地の状況などの解説を交えながら各写真を紹介

中長期的なご支援のお願い

アジアの周辺国だけではなく、はるかアフリカまでを巻き込み、23万人以上の命を奪うとともに、150万人を避難民と化し、その何倍もの人々の生活を一瞬にして破壊したスマトラ沖地震そして津波。その復興には、3~5年、もしくは10年かかるといわれています。

CAREでは、人々の「生きるチカラ」が復興への鍵であり、それを支えていくことが使命だと信じ、今後も引き続き、被災したコミュニティの人々と話し合いを重ねながら、長期的な視野で質の高い支援活動を継続していきます。

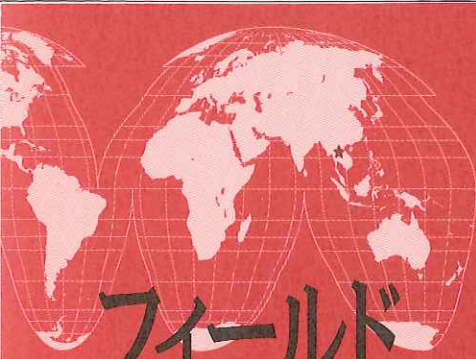
引き続き、金額の多少に関わらず、多くの皆さまからの温かいご支援をお待ちしています。

◆郵便振込み(振り込み手数料免除)

口座番号：00130-6-685603

口座名義：財団法人ケア・インターナショナル ジャパン募金口

*通信欄に「スマトラ」とご記入ください。



フィールド 最前線

スマトラ沖津波 復興支援事業

スリランカ「学校における子どもの心のケアプロジェクト」報告

ケア・インターナショナル ジャパン 事業コーディネーター 草川 町子

ハンバントタはスリランカ南部州に属し、国土の南海岸のほとんどを占めています。そのため、津波の際には子どもを含め、大きな人的被害を受けました。海辺には今なお、椰子の木の合間に家の残骸が残り、被害の大きさと復興の難しさを感じさせます。現地ではCAREをはじめ、多くのNGOが住宅などの建設を行っていますが、家族の死や、転居や失業のために人々が被っているストレスははかりしれません。日々の生活に追われる余り、子どもの教育が二の次三の次になることも多く、子どもの成績や就学率の低下が見られます。子どもたち自身も、身内や友だちの喪失や、急激な生活環境の変化により心にトラウマを抱えるケースが報告されています。

津波から3カ月後、2005年4月に立ち上げた「子どもの心のケアプロジェクト」では、この地域の4つの学校を中心に、子どもたちの心の傷が癒され心身ともに健全な生活を送ることができるよう、活動を行っています。子どもたちがつらい体験を乗り越えていくプロセスには、子どもたちの保護にあたる人々（親、教師、学校関係者等）が適切な知識とスキルをもって彼らに向き合うことが不可欠です。

地域の人々がコミュニティとしてこの課題に取り組んでいくために、この

プロジェクトはあえてトラウマ・カウンセリングという方法は取らず、まず各学校コミュニティの人々による「学校支援グループ」を組織し、啓発と研修のためのワークショップを実施することから始めました。研修の内容は津波のメカニズムの説明に始まり、トラウマに関する知識、それを乗り越える方法など。その上で、各コミュニティで取り組む参加型アクションプランの立て方を学んでもらいました。これはそれぞれの学校コミュニティのニーズに合った活動を、彼ら自身の手によって実現していくための計画書です。ワークショップで各学校支援グループが立てた計画には、水道設備や図書館などの学校設備の整備、音楽やスポーツなどのレクリエーション活動、進学セミナーなどの学習活動のサポートなどアイデアを凝らしたさまざまな活動が挙げられていました。

これらの活動は現在、それぞれのコミュニティで順次行われています。例えば、ある学校では校庭を整備して遊具を設置しました。学校の教師によると、これにより子どもたちはグループで遊ぶ機会ができ、ストレスの発散に役立っているとのこと。ケア・インターナショナル ジャパンでは2008年の3月までこのプロジェクトを継続していきます。



学級委員の生徒たちを対象としたワークショップ風景から



© 2005 CARE/Josh Estey

現在、高校生のヴェヌーシ。卒業したら大学に進み、将来は銀行で働きたいという希望を持っている

〈ヴェヌーシのストーリー〉

デヴァナンダ・マハ・ヴィディヤラヤ学校では144名の生徒が直接的、間接的に津波の被害を受け、また学校も教室や校舎の壁などの一部が損壊しました。この学校の学級委員のひとりであるヴェヌーシ（17歳）は、学校支援グループのメンバーとなり、CAREによるワークショップを経て今では積極的にアクションプランの計画と実施に携わっています。

ヴェヌーシは、彼女を含め間接的に津波の被害に遭っている生徒にとって、自分たちの手でアクションプランを進めていくプロセスそのものが心を癒してくれると言います。彼女の発案で、各学級委員たちが学校の活動により前向きに関わっていくことができるよう、研修の機会も企画されました。ヴェヌーシは、他のクラスメイトが苦難を乗り越えて勉強に集中できるよう、リーダーである自分たちがスキルを身につけ、手助けできるようになりたいと思っています。このスキルは、早ばつなど津波以外の災害時にも役立つものです。

「The skills I'm learning will help me later in life- developing a positive attitude and facing challenges, and developing my confidence to face challenges without fear so that I can accept that a failure is a stepping stone to future success. (CAREのワークショップで学んだことは今後の人生に役立つものです。私は失敗を将来への足がかりとして受け入れられるようになりました。前向きな態度を養うこと、自信を持って恐れずに困難に立ち向かうことを学んだからです)」

インドネシア「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」報告

ケア・インターナショナル ジャパン 事業コーディネーター 鈴木 幸子

被災各国の中で最も震源地に近かったインドネシアのアチェ州では、死者・行方不明者十数万人に加え60万人もの避難民を生み出しました。CAREは、地震・津波発生2日後には被災地入りし、緊急支援活動を行ってきました。また、5年間の復興戦略を策定し、現在アチェ州のバンダ・アチェ、アチェ・ブサル、およびシムル島の3地域にて支援活動を行っています。

ケア・インターナショナル ジャパンが実施している「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」は、CARE全体のこのような取り組みの中、緊急段階から復興段階へ橋渡しをする復旧支援という位置づけとなっています。CAREが実施した調査から、被災地では水と衛生の問題が重点課題のひとつであることが判明しました。長期的に生活できる住宅が建設されるまでの間、清潔な水やトイレへのアクセスが限られ、人々は下痢などの病気を患う危険性があるのです。

このプロジェクトでは、バンダ・アチェおよびアチェ・ブサールの45箇所の避難所や仮設住宅にて生活する避難民約2万人を対象にプロジェクトを実施しています。主な活動は1) 避難民への清潔な水の供給、2) 仮設トイレの排泄物の除去、3) 水と衛生に関する知識の普及です。これまでの支援活動を通して、1) 1日平均17万リットルの水を供給、2) 1日平均800人分の排泄物を処理、3) 看板28台を設置し、水と衛生に関する知識・情報を普及、また水場やトイレの衛生管理を実施する住民組織を各コミュニティに結成しました。

津波以前のアチェ

アチェは原油や天然ガスといった天然資源が豊富で、そのほとんどは日本へ輸出されてきました。実は日本経済と密接な関係があるアチェですが、津波以前は、反政府勢力「自由アチェ運動 (GAM)」とインドネシア政府の間で30年近く紛争状態にありました。これまで延べ約1万5千人の犠牲者を出したと言われていました。紛争中はインドネシア国軍により外部との交流が遮断され、現地の状況はほとんど外の社会に伝わって来ていませんでした。

現在の状況

現在、津波の被害にあった地域では、被災前に住んでいた土地に戻る、あるいは他の土地へ再定住することは急務とされており、CAREの活動の中でも優先度を高めています。土地登記の問題に配慮し、新たな紛争を作り出さないためにも土地登記局と協働し、所有権の明確化を促しています。このようなプロセスには時間がかかるため、避難生活が長期化することが見込まれています。そこで、より安定した水資源を得るために井戸を設置して段階的にタンカーでの水供給を縮小していく予定です。CAREではインドネシアで水分野の専門性の高い現地NGOと協働して、活動を行っています。

現地スタッフの声～水と衛生プログラム チームリーダー アンシアさん～

CAREでは、ただ単に給水サービスを提供するだけでなく、対象地域の人々が自ら問題解決していくことができるよう促すことを重要視しています。コミュニティの人々に参加を促すには、まずCAREのスタッフとコミュニティの人々の信頼関係を築かなければなりません。

水と衛生プログラムのチームリーダー、アンシアさんは以下のように語ります。「インドネシア人スタッフでもコミュニティにとっては外部者。コミュニティとの信頼関係を築くため、避難所に寝泊りしたスタッフもいます」。当事業では水管理委員会を組織し、被災者が主体となって避難所の貯水タンク管理

などを行っています。この水管理委員会には男性のみでなく女性も加わり、双方の意見を踏まえて施設の設置場所の決定などをします。アンシアさんはさらに続けます。「対象コミュニティの人々が水やトイレの問題を自分たちの問題と考えることが大切です。水管理委員会を組織したのはそのためです。委員会メンバーは、施設のメンテナンス方法を積極的に学んでいます。CAREは彼らが責任を持って施設を管理できると信頼していますし、彼らもそのようなCAREの支援姿勢を尊重してくれそうです」。

まとめ

長い紛争期間中、世界からほとんど注目されなかったこともあり、津波をきっかけに世界中から支援が寄せられたことをアチェの人々は概ね肯定的にとらえています。現地では、NGO、国連やODA機関など外国の組織・機関だけではなく、インドネシア国内からもNGOなど多くの組織・機関がアチェの復興支援活動を実施しています。外国の支援組織・機関が多額の資金をもって支援にあたるのに対して、現地のNGOなどの存在はどうしてもかすんでしまいがちです。「インドネシアの人々は何もしてくれなかった」といった誤った印象をアチェの人々が抱かないよう現地の人々の取り組みも尊重した支援が、紛争と地震・津波という二重の災害を経験したアチェの真の復興のためにも重要であるといえるのではないのでしょうか。



CAREから供給された水を使って洗濯をする被災者の人々

© Harsha De Silva

スリランカ人スタッフ 日本活動レポート

Sri Lanka

今回、来日したファイザル・
アブドゥル・カーダー



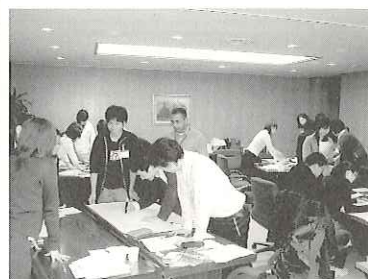
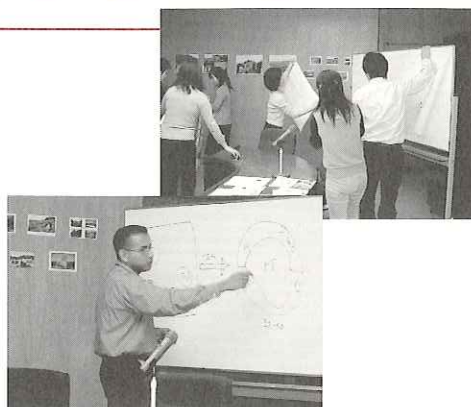
現在、ケア・インターナショナル ジャパンは、JICAの資金協力を得て、スリランカにおいてTEAプロジェクト（プランテーション居住者の生活改善事業）を実施しています。この度、活動の一環としての現地スタッフ日本研修のため、ケア・スリランカのヌワラエリヤ事務所からスリランカ人現地スタッフが来日しました。今回、来日した現地スタッフは、TEAプロジェクト チームリーダーのFaizal Abdul Cader（ファイザル・アブドゥル・カーダー）です。カーダーは、2006年2月13日～25日までの2週間、日本に滞在し、盛りだくさんのスケジュールでさまざまな活動を行いました。ここでは、それらの活動の一部を報告いたします。

●TEAプロジェクト（プランテーション居住者の生活改善事業）について

JICA（国際協力機構）から資金協力を得て、スリランカのヌワラエリヤにおいて実施。対象者は、農園で働く労働者とその家族、約9,000世帯で、その大半は、イギリス植民地時代にインドから労働力として連れてこられたタミル人の子孫です。この事業では、農園経営者も含めて問題を検討し、地域社会から隔離され、劣悪な環境で生活する農園居住者たちの生活環境改善に向けた活動を行っています。

●学生向けワークショップの実施

2月16日、カーダーをファシリテーターに迎えてTEAプロジェクトを題材にコミュニティ・エンパワーメントを学ぶ学生向けワークショップを東京・市ヶ谷のJICA国際協力総合研修所にて開催しました。TEAプロジェクトは、紅茶農園という、スリランカでも独自の複雑な社会構造的問題をはらんでいる地域を対象にしているため、状況説明と理解に時間がかかります。ワークショップは午前・午後の2部に分かれ、最初に事業の背景と経緯を説明し、第2部では具体的にCAREがどのようにして事業を計画し



2月16日の学生向けワークショップの様子

■参加された方のコメントから（抜粋）

「ひとつのプロジェクトを考える際、結果が見えて初めて成功と言える。しかし、その結果を何で測るのか。これまでの授業や講演会において外部者が現地へ入るまでにすべき準備、現地で効果的に住民たちと関わる方法を学び、さらに今回、「評価」という最後のステップまで考えることができたことで、以前にも増して自分の中で「プロジェクト・サイクル」がはっきりと見えるようになった」

実行しているのか、その手順と手法を説明しました。その上で、現場の事例をもとに、事業目標の達成度を測るための指標は何か適切かを参加者がグループに分かれて話し合い、発表しました。すべて英語で行ったワークショップでしたが、20名の参加者は全員、国際協力関係分野で学んでいる大学生・大学院生であり、非常にモチベーションが高く、熱心に取り組んでいました。参加者の皆さん、お疲れさまでした。

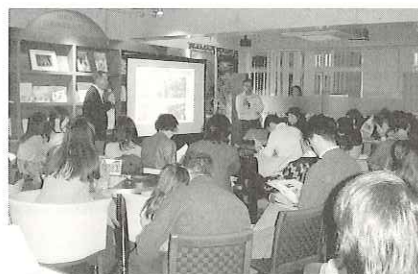
●株式会社 生活の木における一般向け報告会の実施

株式会社 生活の木には、2004年12月のスマトラ沖津波以来、当財団の活動について深くご理解いただき、資金面のみならず広報面などさまざまな形で当財団の活動をサポートいただけてきました。今回は、報告会の会場提供でご協力いただき、環境や国際社会への貢献に対する意識が高いストリート、東京・表参道にある株式会社 生活の木 原宿表参道店において2月23日と25日の2回にわたり、報告会を実施しました。

2月23日

23日は、5Fのコミュニティルームに

て午後6時半から実施、立ち見の人も出るほどの大盛況でした。スリランカに深い思いをもつ人も多く、お仕事帰りに遠くから駆けつけてくださる方もいらっしゃいました。また、スリランカ大使館の方にもご出席いただきました。最初に、スリランカ政府観光局マーケティング広報部長の副島様から、スリランカという国の概要についてお話をいただきました。その後、カーダーによる紅茶農園の生活



生活の木の報告会にて



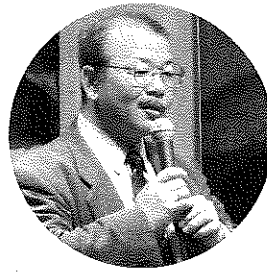
生活の木の店舗前にて。写真右は、カーダーの通訳を務めたプロジェクトマネージャーの栗原（栗原執筆の記事が本誌3ページに掲載されています）

当財団の活動に対する
ご理解とサポートに心
より感謝いたします。

* (株)生活の木
東京都渋谷区神宮前6-3-8
<http://www.treeoflife.co.jp>



(株)生活の木* 販売促進部リーダー 野口様



スリランカ政府観光局
副島様



スリランカ航空 大嶽様

についての説明およびCAREのTEAプロジェクトにおける取り組みについて報告がなされました。来場者からは、「(紅茶農園内の) ゴミや下水問題など住環境についてもっと知りたい」「性別による職業の違いは農園特有の事例なのか」などの質問が出され、日本人の生活からは想像もつかないような紅茶農園に住む人々の生活に対して興味を持って聞いていただけたようです。また、報告および質疑応答終了後に、私たちの活動をご理解いただき、今回の報告会をサポートいただきましたスリランカ航空営業部長の大嶽様からお言葉をいただきました。

2月25日

25日は、2Fのフロアにて報告会を実施しました。2Fは、1Fの店舗から石の

階段をちょっと上がったところにある、おしゃれなスペースで、ハーブティーを飲みながらハーブ関連の本を楽しむことができるハーブティーラウンジ&ライブラリー。事前に報告会への参加申し込みをしていただいていた方以外に、当日、店舗にて買い物を楽しんでいた方にも多くご参加いただきました。今回の報告会

の来場者の中には、日本在住のスリランカ人ご夫妻の姿も見られました。「農園の幼稚園の実施体制は?」「農園の病院はどのような状況か」「農園内の託児所の料金は?」など、農園の生活に関する細かい質問が集中し、農園における生活について多くの方に関心を強くもっていただけました。

■アンケートまたメールなどによるフィードバックから (抜粋)

「スリランカは比較的、教育・生活レベルが高い国と認識していましたので、このような状況があることは驚きでした」

「プロジェクトを通して、紅茶農園の労働者と経営者間のコミュニケーションを円滑にし、情報提供の促進に寄与する貢献をしたことは大変な成果だと思います」

「こういう報告会があることで、興味・関心の範囲が広がり、とてもうれしいです。難しいかと思いますが、現地担当者から直接こうして話を聞く機会が増えるとうれしいです」

「知らないものが多く、また自分自身が知らないことを恥ずかしく感じた」

「現地の労働者との関係構築について、指導側の現地の方にとっても難しいことだとおっしゃっているのを聞いて、協力関係を構築する難しさを感じました。自立支援について、その時期の見極めと、現地スタッフのリーダーシップを育てる方法に強い関心を持ちました」

カーダーからのメッセージ

日本滞在中、私は日本の大学生を対象として報告会を2回、ワークショップを1回、さらに、一般の市民向けに報告会を2回行いました。また、都内ではJICAやJBICなどいくつかのミーティングにも参加しましたし、京都府和束町のお茶農園の視察へも行きました。これらはケア・インターナショナル ジャパンのスタッフのサポートなしではこなせなかったと、スタッフの皆さんに感謝しております。

仕事以外では、東京のお台場のような近代的で活気のある場所や、京都や奈良のような伝統と歴史の感じられる芸術的な場所にも足を運び、近代的な部分と伝統的な部分の両方を見ることができて、とてもバランスのとれた、興味深い経験をしたと思います。日本料理も日本滞在中には大いに楽しみました。特に、お寿司とおにぎりがとても気に入りました。

私は、大学生たちに対してDMEについてのワークショップを実施しましたが、そのとき、学生たちが全般的にとっても静かであるという印象を受けました。最初は、モニタリング・評価に関心がないのでは、とも思いましたが、グループで行った作業やプレゼンテーションを終えたとき、その成果を見て、彼らは皆とてもよく私の話を聞いてくれたことがわかりました。

私の日本に対する第一印象は、とても静かな国で、みんな公共の場所も非常に静かである、というものです。日本にいる間、私は自分の国と比較して日本の変化や改善されている部分を目にするたび、これらの変化や改善とそれに対する金銭的投資との関係について考えました。しかし、私たちはお金をかけなくても、たいいていの変えたり、改善していくことができるということがわかりました。ある国が発展していくためにもっと大切なことは、そこに住む人々の姿勢なのだと思います。



Cader



日本の日曜日子どもたちとともに。湘南海岸にて



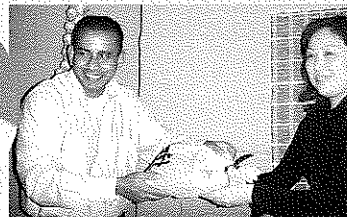
ゆりかもめに乗ってお台場へ。お台場は、カーダーの特に気に入りの場所となりました



「生活の木」の近くにできた最新スポット、表参道ヒルズにも早速、足を運びました



帰国日の前日の打ち上げにて



当財団スタッフ一同よりプレゼント。「お疲れさまでした!」

私スタイルのCAREライフ

私の人生の大切な出会い ～「ボランティア」という選択～

ケア・インターナショナル ジャパン
デザインボランティア

佐藤 よし子



毎日会社勤めと家事に追われる普通の私にも参加できるボランティアはないかと探していたところ、ケア・インターナショナル ジャパンのホームページでデザインボランティアを知り、ここから私とCAREとの関わりが始まった。

デザイナーとしては十数年のキャリアを積んだが、ボランティアとは全く無縁の生活。その上、私の仕事は公共施設などの案内板や看板を中心とするサインデザインという特殊な分野なので、果たしてケア・インターナショナル ジャパンの望む「デザインボランティア」として役に立てるのか多少疑問に思いながらの応募だった。ただ子どもたちが成長して気持ちに余裕ができたこともあり、少しは人のためにこの余裕を使ってもいいのではないかといい思いがあった。

幸いにも展示会イベントのような、経験のある分野の仕事があり、昨年は微力ながらも日比谷公園にて開催された「グローバルフェスタJAPAN」におけるブース用展示パネル、また、ケア・インターナショナル ジャパンがカンボジアにおいて実施しているレインボー事業のポスターデザインなどでお手伝いをさせていただきました。素材となる写真や文言をメールしていただき、それらをひとつの画面に組み立てていく。書体や色のバランスを考え、完成時のサイズや展示される場所の状況などできる限り考慮して制作作業を進める。素材の中には心打たれる写真や幼い子供が描いた絵などもあり、すっかり感情移入してしまうこともあるし、地図の国境ラインをなぞりながら思いはその国へ飛んでしまうこともある。

またボランティアと言えども引き受ける以上はお金をもらう仕事と一緒に、締切りもあり、担当者の意向もある。CAREのスタッフにとってはきっと知って当たり前の地図中の国名と国の位置が合致せず宿題のように地図帳からせせせと探し出したり、しかも英語の資料だったりすると、忘れたはずの向学心が刺激され時間を忘れてしまうこともしばしばなので、

制作作業は深夜に及ぶこともある。しかし毎日丁寧に原稿をチェックされる確かな指示をくださるスタッフとのやりとりの中で、金銭の授受のある仕事よりはるかに、責任と充実した時間を感じたことは全く予想外だった。

そればかりでなく、さまざまな事業の資料にふれているうちに、日々の生活の中で当たり前だと思っていたこと、例えば専門教育を受けられたこと、仕事を得て家族を食わせてゆけること、病気になったらいつでも医療が受けられることや何より自分の生き方を自分で選択できることなどがいかに恵まれたことであるか、生まれて初めて自分自身の感覚としてとらえることができた。それは地を這っていた視線が鳥の視界になったような新鮮な驚きで、こんな

歳になり日常に追われていると、なかなかそんな劇的な体験をする機会はないので本当に驚いた。

狭い世界のなかで生活している私には今まで何もできなかったし、国際協力という言葉も私にとっては非日常でそんな発想もなかった。これからもできることは多くないかもしれない。しかし気づかなかったことに気づいたこと、考えるきっかけを見つけたことで、もしかしたら私は国際協力ボランティアのスタートラインに立てたのではないかと不遜ながらも思っている。

年の瀬、娘を伴って銀座の画廊で行われた津波一周年イベントの写真展にお手伝いに出かけた。口で言ってもどうせ分からない今時の子どもだが、見るだけ、聞くだけでもきっと小さな種を持ち帰ることができるのではないかと期待した。

なんとなく始まったボランティアのある生活は、期せずして根を張りつつあり、少し人生観が変わったような気がしている。



静岡県にお住まいの佐藤さん（写真、右）。昨年10月、東京で開催されたグローバルフェスタJAPANに高校生の娘さんと足を運び、CAREのブースを訪れてくれました



昨年末のスマトラ沖津波1周年企画「チャリティ写真展」（本誌4ページを参照）にも娘さんとお手伝いに来ていただき、報告も聞いていただきました

Our Supporters

会員、寄付金協力者紹介

(2005年11月1日～2006年2月28日)

(敬称略・50音順)

みなさまの温かいご支援に事務局スタッフ一同、心よりお礼申し上げます。

●個人賛助会員

(新規)

井藤 千嗣
小川 良雄
高柳 貴子
宮崎 総一郎

●個人準賛助会員

(新規)

会田 ひとみ
櫻本 慈弘
並木 孝
ERIC KORPIEL

●パッケージ会員

(継続)

天羽 節子
飯田 多美
石黒 秀彦
市川 直子
泉 聡司
伊東 直
香取 昭
刈谷 敏久
河本 泰行
庚 珍化
菊地 恵美子
近藤 春恵
酒井 恵美
酒井 健
桜井 純子
瀬尾 佳伸
竹内 智之
成瀬 富美子
鳩山 由紀夫
松崎 史夫
三浦 みどり
水谷 素彦
安則 和子

●法人会員(継続)

(有)秋山商事
セイコーインスツル(株)

東京電力(株)

日産自動車(株)
(財)日本国際協力
センター
ミマスクリーンケア(株)

●個人賛助会員

(継続)

相川 富美子
青山 絢子
安部 洋子
荒井 慶子
安斉 徹男
石森 菊江
稲川 素子
猪野 愈
今堀 和友
植田 兼司
植田 東子
内ヶ島 敏博
内田 成輝
小沢 憲
影山 光太郎
笠原 忠夫
北村 知子
栗山 昌子
黒井 満
小泉 潔
合原 正二
高鹿 栄助
近藤 綾子
山東 昭子
篠崎 襄
高島 倫子
武田 光子
中島 千代子
成川 豊樹
仁科 雅夫
西村 すが子
羽坂 哲子
浜田 美芽
林 厚
原 禮之助

平林 義彰

堀岡 洋子
本間 ノブ子
松下 一弘
三浦 みどり
三好 達
椋木 千代子
森 義友・真知子
師田 志津恵
横田 淳
和田 洋

●個人準賛助会員

(継続)

有野 博實
有馬 光子
生稲 精子
岩本 依子
植木 昭
兒玉 格言
安淵 聖司

●寄付金協力者

岡野 えつこ
川島 久美子
佐々木 ミドリ
住田 敏彦
野口 三保子
野田 佐智子
脇田 里美

(特活)環境アリー
ナ研究機構
計画課有志一同
鵠沼高等学校
高津中学校
(株)ダビンチ
学校法人 東洋英和
女子学園
社団法人日本記者
クラブ
Think the Earth
プロジェクト

●冬募金協力者

藍野 仁志
青木 幹多
青柳 萬亀子
青山 絢子
青山 歌子
秋山 剛康
朝沢 まり子
足立 ひろ子
渥美 伊都子
安部 洋子
新井 美代子
荒井 慶子
荒記 泰雄
有田 尚樹
有野 博實
家宇治 賢
石井 栄子
石川 真穂
石樽 純子
石戸谷 由子
石原 一子
石原 利枝子
石渡 咲子
泉山 高濤
市川 貞
伊藤 英夫
稲垣 滋
稲本 俊
稲森 禮子
犬飼 星斗
井上 武志
今井 隆吉
今村 達男
岩村 浩司
岩本 妙子
上田 美江子
上野 俊子
上原 綾子
植村 久志
魚本 秀
内田 成輝
内田 英子

内田 三美

海野 光雄
海老原 孝治
遠藤 純子
遠藤 都志恵
大江 佐知子
大岡 純雄
大河原 良雄
大越 隆文
大竹 静香
大塚 福恵
大西 道生
大西 慶子
大西 守
大野 洋子
大萩 順蔵
大橋 津満子
大羽 きよ
岡崎 二三
尾形 孝
岡田 知愛子
岡田 良雄
岡庭 明彦・万里子
岡村 秀美
小川 糸み
小川 奎子
小川 朝子
沖田 晋吾
小倉 恒雄
小澤 太郎
柿澤 未途
柿沼 實
桂 弘
桂 秀子
金田 平夫
金田 招重
川上 道一
川城 正信
木内 やい
菊池 正男
菊地 恵美子
岸本 桂子
菅原 由紀子

北岡 さよ子

城戸 高光
貴布根 桂子
木村 寿美
草川 益美
工藤 彰子
栗原 保子
黒河内 久美
ケネス クボ
小井土 喜代子
高鹿 栄助
黄金井 達夫
小倉 婦美子
小平 靖
小林 憑四郎
小堀 宗武
小宮 初雄
米谷 信子
小谷中 剛
是枝 隆定
木幡 清子
小渡 隆夫
斉藤 惇生
斎藤 俊子
斎藤 由美
斎藤 喜子
佐伯 佳代
阪上 正昭
榊原 真美子
榊原 五子
桜井 純子
笹川 幸子
佐々木 友子・貴士
佐々木 美晴
佐藤 貞三
佐藤 賢司
佐藤 健治
佐藤 妙子
佐渡 弘・ユリ子
三瓶 正子
椎野 君子
鹿野 好子
柴田 享美・裕子
柴田 みち子
渋沢 厚美
川島 敏彦
島 実津江
島田 富英

庄司 慈明
白石 露
進谷 健
進来 富子
菅沼 みゆき
菅原 規仁
菅谷 弘
杉本 庄吉
鈴木 由美子
鈴木 久恵
鈴木 生子
鈴木 政史
鈴木 靖郎
角 章子
角 充弘
住田 織枝
諏訪 孝
関口 真理恵
瀬口 博子
曾我 ふき子
平 和代
高木 富美子
高嶋 正明
高瀬 智恵
高瀬 覚照
高橋 良郎
高橋 裕子
高畠 美人
高松 妙子
高山 友二
武川 節
竹腰 郁代
武村 悦子
竹村 信夫
多田 喜久子
辰野 明
谷口 七郎
塚原 国男
辻 節子
土田 ヨウ子
角田 法子
鶴園 禮子
寺岡 紀美子
戸川 幹夫
戸田 よし子
永井 康夫
中島 千代子
長嶋 久子
永末 美代

中野 紀美代
永野 京子
中平 立
長船 昌吾
中本 さゆき
奈良 耕作
難波 嗣朗
新実 功
西谷 宏之
西山 敬三
西山 キミエ
西山 瞳
菲澤 嘉雄
野口 晏男
野口 千歳
野崎 美知子
野田 幸裕
乗富 俊二
野中 敏子
野中 稔市
野村 健太郎
橋本 靖男
長谷川 陽子
鳩山 安子
羽田 英彦
林 桂子
林 正敏
原 勝太郎
東 末子
平林 薫
廣島 総司
廣田 美代子
広段 隆
藤 ちえ
藤本 たみ子
布施 博子
北條 真弓
堀井 武男
堀岡 洋子
堀田 シナ
本田 早苗
牧野 正久
町井 絹子
松井 おさむ
松浦 芳枝
松浦 葉子
松川 祐子
松田 茂之
松葉 芳子

御木本 澄子
三島 弘子
水島 雅子
道添 花恵
満島 裕子
満島 フミ
宮川 慎二
宮川 武夫
村上 悦雄
村松 寅三郎
村山 良一
森 時子
森下 泰夫
森脇 道子
諸井 政昭
諸岡 孝昭
師田 志津恵
矢沢 歌子
安田 光男・春菜
柳田 順達
柳谷 誠子
山内 朱実・実華
山口 義雄
山崎 勝之
山田 清一
山田 みつゑ
山田 昭広
山中 康平
幸 暁美
横田 笑
横田 謙
横山 勇
横山 克美
吉川 晋平
吉田 美佐江
吉原 幸一郎
吉村 精仁
米田 清
領毛 幸子
脇山 洋子
和田 寛
渡辺 彥み子
渡部 怜子
渡辺 京子
渡辺 省三
渡辺 康隆
渡部 加代子
渡会 武嗣
MURATA ANGELINA

遠藤行政書士事務所
杉の子幼稚園PTA
ダイヤ精密(株)
富田税理事務所
(財)日本ボールルー
ムダンス連盟
(株)丸和
ミマスクリーンケア(株)

●スマトラ沖地震
による津波復興
募金協力者

石川 肇子
井上 仁
大竹 憲子
影島 保子
カタオカ マユミ
上村 めぐみ
城戸 高光
小貫 茜
近藤 恵子
近藤 美智子
佐々木 真二
佐藤 サダ子
佐藤 美幸
篠田 恵
嶋津 義久
清水 緋奈子
白石 光一
高木 大輔
中西 淳子
中村 治男
西村 修
西村 隆一
野口 千鶴
野口 千歳
前田 英樹
南川 純子
村松 良樹
山崎 博子
山下 修三
山元 良男
横田 謙
吉田 和夫
吉田 喜己
吉野 千穂
脇坂 佐記子

NPO法人ウォーター
セーフティーマネー
ジメント協会
大阪府立大和川高
等学校
(特活)環境アリー
ナ研究機構
ケア フレンズ札幌
(株)生活の木
聖心大学同窓会宮
代会
(特活)パブリックリ
ソースセンター
文教大学グローバル
サークル&ボランティア
PEOPLE PURPIL

●パキスタン地震
緊急募金協力者

青木 平三
青木 慶子
青嶋 光枝
青戸 精二
青野 和子
秋田 清実
秋山 安子
秋山 由利子
朝倉 徳道
朝倉 克巳
芦原 俊介
足立 ひろ子
阿部 隆
天石 和子
荒井 慶子
荒記 泰雄
新崎 まり子
荒堀 弘子
有田 尚樹
安藤 ヒロ子
伊沢 敬次
石堂 紳一
石本 満里子
石森 菊江
猪瀬 道子
板津 智子
一條 和生
猪股 すみい
猪股 英子
今堀 和友

井村 広次
岩井 清満
岩田 周子
岩田 隆介
岩本 依子
植村 淳子
白田 典子
馬渡 弘人
梅下 茂乃
梅田 しか子
浦川 美智子
江口 光子
柄澤 貴也
遠藤 加代
大岩佐 知子
大越 隆文
大澤 貴美子
大須賀 敬子
大曾根 義子
太田 孝雄
大西 庸介
岡崎 由侑子
岡田 安弘
緒方 四十郎
沖 高司
奥田 美佐枝
奥村 真一
小崎 政純
小沢 晃子
尾関 幸子
カタオカ イッペイ
加藤 さち子
加藤 尊明
兼高 幸子
鎌田 昭子
上村 めぐみ
神谷 齋
亀田 久忠
鴨志田 一穂
鴨田 郁子
川口 眞由美
川崎 良子
河鱈 洋子
神田 圭子
木内 智弘
北川 暁子
北原 政澄
城戸 毅
城戸 高光

Our Supporters

木下 佳子
木村 薫
木村 寿美
朽木 亮
工藤 昌子
久野 健
久保田 浩司
熊沢 正幸
栗原 喜七
栗原 未来
黒田 則子
桑江 昌裕
古池 悦子
小池 公代
小池 照子
高坂 知節
河野 満理子
小浦 芳信
黄金井 達夫
国府方 嬌子
小塚 実千代
小沼 順子
小林 えりか
小林 清
小林 隆子
小林 正子
小原 健二
小宮山 信幸
近藤 藤作
近藤 正昭
斉藤 和子
斉藤 かよ子
斉藤 孝一
齊藤 寿子
斉藤 ヒサ子
斉藤 由美
斉藤 喜子
酒井 琴子
酒井 英和
阪上 昂
佐久間 正夫
桜間 弘三
佐々木 研二
佐藤 雄司
佐藤 サダ子
佐藤 政行
佐藤 光広
澤口 美穂子
下畑 清臣

志知 和人
篠原 真美
川島 敏彦
島 実津江
嶋田 真理子
嶋津 義久
清水 知江
首藤 恵美子
代田 良恵
白谷 清二
白髭 真理子
新城 泉紀
新妻 喜政
菅家 道人
菅原 すて子
杉田 文枝
杉田 裕子
鈴木 由美子
鈴木 昭・みつほ
鈴木 秀子
脊川 洋子
瀬戸 禎子
タイス ヘルガ
高木 大輔
高木 とし
高橋 ハマ子
高橋 秀雄
高橋 広
高橋 力夫
田口 瞳
田口 汎子
竹崎 華都実
竹下 茂生
武田 恭子
竹原 直子
武村 悦子
田島 修治朗
多田 美幸
建田 幸壮・智子
谷崎 孝子
辻本 巖
土本 志保子
角田 さち子
角田 法子
寺内 和弘
東條 毅
徳沢 道子
徳田 智子
豊田 仁美

内藤 伸広
長尾 とみ子
長岡 功
中興弥寺 隆
中川 健
中島 智恵子
長嶋 正美
中島 ヨシ子
中谷 幸
中西 淳子
中野 克郎
長野 雅子
中村 歌
中村 夫佐乃
中村 政憲
中谷 みき・みはる
奈須 達郎
鍋田 忠男
楢崎 正博
成瀬 義明
成野 ふみ子
西谷 光恵
西野 松子
西村 昇
新田 克典
布川 保雄
延原 敬子
野辺地 きみ子
萩原 史恵
花川 直子
羽根田 輝雄
浜辺 マサエ
原口 美知恵
東 晶子
日比 みづ江
平木 恒夫
平野 雅子
廣田 美代子
深作 すみれ
藤谷 武男
古 恭子
古田 昌子
細井 幾代
堀井 武男
堀川 憲子
堀田 シナ
本田 至
本田 早苗
本廣 良江

前勝 和代
前田 千代子
牧野 なぎさ
増田 源一
松井 おさむ
松浦 いづみ
松下 力
丸山 勝美
三浦 浩成
水野 清邦
水本 眞吾
緑川 正二
美野 勝
宮地 ヨリ子
宮本 統
村木 敬
村自然
村西 幹生
村松 寅三郎
命長 廣司
森岡 昌子
森川 太美
森野 智栄子
安田 和男
山岸 克至
山崎 秀男
山下 修三
山田 徹・智美
山田 恭子
山野 栄次郎
山元 良男
湯川 夏樹
横田 晶子
吉田 皓治
吉田 隆男
吉田 誠
吉村 真実
吉村 るり子
米島 定宏
米山 朗弘
ロキン
鷲谷 和彦・扶字子
綿岡 輝雄
渡辺 忠行
Simonsen Andreas
海原の会
大阪府立大和川高
等学校

大野滋童園
鹿嶋市立豊郷小学
校1年
(特活)環境アリー
ナ研究機構
ケア・フレンズ 東京
神戸大学国際協力研究
科バ地震支援委員会
堺プレイザーズ
相模大野駅前郵便局
志摩市社会福祉協議会
松陵西小学校3年2組
スナック 喜代
仙台北百合学園高
校 奉仕委員会
仙台市立四郎丸小
学校あすなろ児童会
大塚観光会館
ダイヤ精密(株)
鶴田メンタルクリニック
10ンティア・キング
天理教秋田教区女
子青年部
東京測量調査設計
事務所協同組合
都和小同窓会
七重浜郵便局
(有)パシフィック実業
東町和楽会
福井市くるみ児童館
福岡県支部協議会
文教大学グローバル
サークル&ボランティア
まちゃんストア
松崎中学校 5組
瑞浪郵便局
(有)宮崎パシフィック
DEION Kick Boxing GYM
IKKI
NTT労組退職者の会

CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.2
2006年3月31日発行 (季刊)
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel : 03-5950-1335
Fax : 03-5950-1375
E-mail : info@careintjp.org
www.careintjp.org



CARE Notice Board

60年前、CAREパッケージを受け取った方を探しています。

1946年5月11日の夕方、戦争で損傷を受けたフランス、ル・アーブルの港にCAREパッケージ第一便が届けられました。フランスの被災した人々に対するアメリカの友人や親戚からの贈り物。ヨーロッパの被災者たちを救うために、アメリカの市民団体が集まって設立されたCAREの活動の始まりでした。その後、CAREの支援は、ヨーロッパのみならず、南米、アフリカ、アジアへと世界各地へ。戦後の日本では、横浜に事務所が開設され、8年間にわたって約1,000万人の日本人がCAREの支援を受けたと言われています。

今年、2006年5月11日は、CAREパッケージ第一便が届けられた日から60年。戦後の日本の復興と人々の生きていく力を支えたCAREの歴史、そして現在、大きく成長したCAREの国際的な支援活

動をふりかえるため、当財団では、今年の5月以降、さまざまな企画を検討しています。

ケア・インターナショナル ジャパン事務局では、当時、CAREパッケージを受け取られた方やCAREに関連する思い出をお持ちの方を探しています。当時のCAREの活動について直接的、間接的にご存知で、情報提供にご協力いただける方は、当財団事務局までぜひご一報ください。



*皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、ご感想などは、CARE World誌面上にてご紹介させていただきます。また、「ケアの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に“CARE World”を広げていきたいと思いを。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしております！

CARE World

Vol. **1** ケア・インターナショナル・ジャパン
Newsletter
November 2005

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国以上で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。



care®

CARE World Vol. 1

Contents



page 3 事務局長からのメッセージ

page 4 事務局からの報告

page 5 ケア・インターナショナル ジャパン 2005年度事業計画

page 8 フィールド最前線
「グローバル・アクション・ウィーク2005に参加して」
サマキ クマールII プロジェクト・マネージャー 遠藤 恵



page 10 Smile from Cambodia ~カンボジア発スマイル宅配便
サマキ クマールII プロジェクト・マネージャー 遠藤 恵

page 11 私スタイルのCAREライフ
株式会社 生活の木/Tree of life(pvt) Ltd. 代表取締役社長 重永 忠
ロンドン大学LSE 国際関係学部 斉藤 百合



page 13 Our Supporters ~会員、寄付金協力者紹介

page 16 CARE Notice Board

ケア・インターナショナル ジャパン 新ニュースレター『CARE World』発行

2005年7月1日に、当財団は「(財) ケア・ジャパン」から「(財) ケア・インターナショナル ジャパン」へと団体名称を変更しました。これにともない、ニュースレターも新しい形で皆様にお届けすることになりました。

新ニュースレターのタイトルは、『CARE World』。世界の各地で支援活動に携わるCAREのスタッフ、CAREの事業に参加するコミュニティの人々、CAREの活動を支える世界中のサポーターの人々。すべての人がCAREを通してつながること、その大きな力が活動を効果的な形で前へ進めています。

新ニュースレターでは、CAREのプロジェクト実施地域から、最新の活動状況や現地コミュニティの人々の声を多くお届けするとともに、国内でいろいろな形でCAREの活動をサポートしてくれる方々の活動などを紹介していきます。このニュースレターを開くと、皆が1つの“CARE World”でつながっているような気持ちになれる—そんな思いを込めた創刊です。

事務局長からのメッセージ

2005年7月に、ケア・ジャパンはケア・インターナショナル ジャパンとして新たなるスタートを切りました。今までの活動実績をベースに、世界最大級の国際協力NGO、CAREのメンバーとして、よりグローバルに活動を展開し、途上国の最も弱い立場にいる人々が、平和に、そして尊厳を持って生きていくことができるよう、プロフェッショナルな支援を行っていきます。

今までご支援いただきました皆様にお礼を申し上げますとともに、引き続きご協力いただけますよう、心よりお願い申し上げます。

さて、本号は、ケア・インターナショナル ジャパンになって初めてのニュースレターです。CAREのビジョンである「誰もが人間らしく生きる平和な世界」は、CAREの国内・海外スタッフだけではなく、ドナーの皆様、インターンやボランティアの方々、そして国際協力関係者の力をお借りし初めて実現するものです。そこで、新ニュースレター「CARE World」では、途上国や国内の活動報告のみならず、このビジョンを達成するために協力してくださっているさまざまな方たちの「CAREへの想い」と「つながり」をご紹介します。ご期待ください。

さて、昨年末に発生しましたスマトラ沖津波から一年と経たない間に、アフリカの食糧危機、北米の南部や中米（エルサルバドルやグアテマラ）のハリケーン、そして10月のパキスタン地震と、災害が次々と貧しい人々を襲っています。ケア・インターナショナル ジャパンでは、パキスタン地震緊急募金にご協力いただきました方々に感謝申し上げますとともに、引き続きスマトラ沖津波の復興支援にご協力をお願い申し上げます。12月25日～29日には、スマトラ沖津波一周年イベントとして、写真展や講演会、チャリティ・パーティを開催する予定です。是非、お友達をお誘いあわせの上、ご参加くださいませ。お待ちしております。

(財) ケア・インターナショナル ジャパン
事務局長 野口 千歳

事務局からの報告

当財団監事の 原 禮之助氏が 国連工業開発機関 (UNIDO)の 親善大使に就任

2005年6月20日、オーストリアのウィーンにおいて、当財団監事の原 禮之助氏が国連工業開発機関 (UNIDO)*の親善大使に任命されました。

原氏は、セイコーインスツルメンツ(株) [現セイコーインスツル(株)]で代表取締役社長などを歴任するなど、日本の産業界において活躍するかたわら、UNIDOの産業開発プログラムに対する助言やレビューなどを通してUNIDOの活動にも貢献してきました。今後、原氏は、UNIDO親善大使として、講演や執筆活動などを通じ、日本の各界におけるUNIDOの活動に対する理解・支援を促進することが期待されています。

*開発途上国における工業開発を促進し産業協力を推進することを目的として、1967年に国連総会決議に基づき発足、1986年に専門機関として独立。事務局はオーストリアのウィーンにあり、現在、171カ国が加盟。

「グローバルフェスタ JAPAN2005」に 参加しました。



毎年恒例の国際協力NGOや国際機関などが集まって活動紹介を行うイベント「国際協力フェスティバル」は、今年は「グローバルフェスタ JAPAN2005」として2005年10月1日(土)、2日(日)に日比谷公園にて開催されました。当財団はこのイベントに毎年参加していますが、今回は新団体名称「ケア・インターナショナル ジャパン」としての初の参加となりました。ブースでは、CAREのロゴ入りグッズの販売のほか、パネルや資料を通して活動紹介を行い、CAREのことを知らなかった多くの方々に私たちの活動について説明するよい機会となりました。当日、お手伝いいただきましたボランティアの皆様、どうもありがとうございました。

スリランカ・フェス ティバルに参加しま した。

10月15日、16日の2日間にわたり、東京・代々木公園にてスリランカ・フェスティバルが開催されました。ケア・インターナショナル ジャパンは、日本でスリランカを支援するNGOのネットワーク組織「スリランカ復興開発NGOネットワーク」の一員として参加し、現在実施中の「プランテーション居住者の生活改善事業」およびスマトラ沖津波復興支援事業「学校における子どもの心のケアプロジェクト」について、写真とともに紹介しました。スリランカの伝統文化・芸能や食べ物を紹介するブースとは一味異なるコーナーではありましたが、国際協力に興味を持つ学生の方など、日本ではなかなか知られていないスリランカが抱える問題について熱心に耳を傾けていただきました。

ケア・インターナショナル ジャパン 2005年度事業計画

ビジョン

ケア・インターナショナル ジャパンは、誰もが互いを尊重し、人間らしく生きる平和な世界を目指しています。

ミッション

ケア・インターナショナル ジャパンは、コミュニティの人々と共に貧困を生み出す根源の解決に取り組みます。

基本方針

ケア・インターナショナル ジャパンは、アジアにおいて最も不利な立場にいる人々が自立発展するための支援を行います。

近年、紛争や災害が増加する傾向が見られますが、最も弱い立場にいる人々（極度に貧しい、または社会的に隔離・迫害されているなど）が最も大きな被害を受ける構造は依然として残っています。そこで、今、国際社会に求められているのは、一時的、表面的な救援や支援活動ではなく、災害を予防する、または貧困や紛争の根源を解決し人々の自立を支援することです。

2005年度の焦点

2004年9月の理事会で承認された長期戦略「グランドプラン」が軌道に乗り始めました。昨年度中に、新基本方針を「最も不利な立場にいる人々が自立発展するための支援」と決めました。本年度は、国内の教育機関や関連組織、現地事務所およびケア・インターナショナルのメンバーとの戦略的なパートナーシップをより強化し、海外における支援プロジェクトや国内における広報活動など、全ての活動に基本方針を反映していきます。

また、CAREが今年で設立60周年を迎えるにあたり、メンバーとしてのケア・インターナショナル ジャパンは、CAREのネットワークを最大限に活かし、世界的基準（グローバル・スタンダード）に沿った支援活動の展開により一層尽力していきます。

支援活動の概要

現在ケア・インターナショナル ジャパンは、カンボジア、スリランカ、タイ、インドネシア、アフガニスタンの5カ国において支援プロジェクトを実施しています。カンボジアとスリランカでは、既存プロジェクトの質の向上に注力していく一方、発展型となる新規プロジェクトを積極的に展開します。昨年度開始したスリランカおよびインドネシアにおけるスマトラ沖津波復興支援事業に関しては、現地の復興状況に応じて、長期的な支援の可能性を模索していきます。

また、本年度は特に新規プロジェクトの開拓に力を入れます。インドネシ

ア、カンボジア、東ティモール、ネパール、ラオスを中心にプロジェクト地を訪問し、現地事務所との協議を重ね、事業の計画を練り、実施していきます。国際理解教育事業としては、レインボー事業が本年度に終了するため、新しいプロジェクトを開始するための準備を行います。

活動計画

1. 国際開発協力事業

①女子教育事業 サマキクマールII

対象地域：カンボジア

（ブレイベン州、ピムチョア地区）

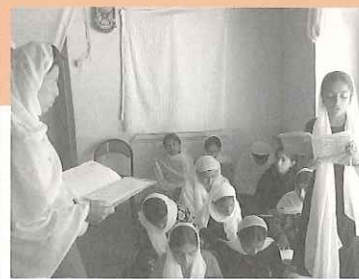
実施期間：2004年2月～2006年12月

（2年10カ月間）

主支援者：国際協力機構（JICA）

この事業は、2002年10月より1年間にわたって実施した事業、「サマキクマール」の経験を踏まえて計画されています。対象地区であるピムチョア地区では、貧困家庭における学費負担が困難であることや住民の女子教育に対する理解不足などの理由から、女子の就学率が非常に低い状況です。サマキクマールIIでは、この地区の女子がフォーマルおよびノンフォーマル教育にアクセスできるよう、家庭、コミュニティおよび学校の環境を改善することを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、学校とコミュニティにおいて女子生徒、親、教師、関係者などを対象とした意識向上活動を実施します。また、奨学制度や識字教室も継続して行います。さらに本年度は、住民によって計画された女子教育支援のためのアクションプラ



ンを実施する活動も行います。

②コミュニティのための人材育成事業 (女子教育奨学制度事業Ⅱ)

対象地域：カンボジア

(カンダール州、ルックダイク地区)

実施期間：2004年10月～2007年9月(3年間)

主支援者：ケア フレンズ岡山、ケア フレンズ・東京

この事業は、2002年～2004年に実施した女子教育奨学制度事業で中学課程を修了し、高校に進学した奨学生を対象としています。奨学生たちの高校課程修了を支援するとともに、彼女たちがコミュニティの発展に役立つ知識・技能を身につけることを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、奨学生に対する寄宿費や補習授業費などの提供、奨学生、親、コミュニティの人々などに対するジェンダー意識向上ワークショップの実施、地区奨学制度運営委員会の運営管理能力向上のための活動などを行います。また本年度は、上記の活動に加えて、奨学生たちが習得した知識・技能をコミュニティの人々と共有し、社会に還元できるよう、ほかの生徒や地域の人々を対象として奨学生によるコミュニティ活動を実施します。

③移動教育事業

対象地域：タイ(ウボンラチャタニ県4郡)

実施期間：2003年1月～2005年12月(3年間)

主支援者：ケア フレンズ・東京、ケア フレンズ岡山

この事業では、都市と農村部の経済格差が広がるラオス国境に近い遠隔地において、教育環境が未整備な小中学校20校を図書や教材を載せた車が訪問し、教育活動を行っています。子どもが

中心となった参加型の総合的教育により、子どもたちが主体的に考え、表現し、行動する力を引き出し、自ら問題解決できる力を養うことを目標としています。

本年度は、各学校での総合的な学習活動を継続し、また、教師や青年ボランティアに対するスキル研修、青年ボランティアによる拠点地区での図書貸し出し活動なども引き続き行います。また、学校図書貸し出しシステムの導入やモデル学校における副教材の共同作成などの活動を新たに実施します。

④プランテーション居住者の生活改善事業

対象地域：スリランカ

(中央州およびウバ州にある15の紅茶農園)

実施期間：2003年5月～2006年5月(3年間)

主支援者：国際協力機構(JICA)

この事業は、プロジェクト対象地の紅茶農園居住者を対象としています。居住者の多くは、19世紀のイギリス植民地時代に労働力としてインドから連れてこられたタミル人の子孫で、社会的・経済的に地域社会から隔離され、劣悪な生活環境での生活を余儀なくされています。この事業では、居住者たちの社会生活の改善を目標としています。

本年度は、住民組織である参加型チームに対するトレーニングなどの実施や農園外部の社会・行政サービス提供団体との連携強化を継続します。また、参加型チームによる参加型チーム以外のプロジェクト対象者に対する普及活動、設立されたインフォメーション・センターの有効活用、居住者自身により計画されたミニプロジェクトの実施などを新たにを行います。

⑤スマトラ沖津波復興支援 学校における子どもの心のケア プロジェクト

対象地域：スリランカ

(南部州、ハンバントタ県、アンバラントタおよびティッサマハラマ)

実施期間：2005年4月～2007年3月(2年間)

支援者：学校、協賛企業、一般寄付

2004年12月に発生したスマトラ沖地震の津波被害により、スリランカでは3万人以上の命が奪われました。被災者の中には、家族や友人を失った人も多くいます。インフラなどのハード面での復興だけでなく、心のケアなどソフト面での支援も重要です。この事業では、被災した子どもたちの心の傷が癒され、心身ともに健全な生活を送ることができるようになることを目標としています。

昨年度は、子どもたちの心理的・精神的ニーズについて調査を行いました。また、親や教師などから構成される「学校支援グループ」のメンバーに対して、子どもたちの症状やその対応策についての意識向上ワークショップなどを実施しました。本年度は、上記の活動を継続するとともに、各学校において子どもたちのニーズに沿った参加型活動計画を策定し、実施していきます。

⑥スマトラ沖津波復興支援 国内避難民のための水と衛生 プロジェクト

対象地域：インドネシア

(アチェ州、バンダ・アチェおよびアチェ・ブサル)

実施期間：2005年3月～12月

(10カ月間)

支援者：協賛企業、一般寄付

スマトラ沖地震の津波被害により、



インドネシアでは約53万人が家を失うなどで国内避難民となり、仮設住宅や避難所での生活を強いられています。CAREが実施した被災コミュニティのニーズ調査によると、水と衛生の問題が深刻であることが確認されました。この事業は、仮設住宅や避難所で生活する国内避難民が、下痢などの病気に悩まされずに健康な生活を送ることができることを目標としています。

昨年度は、タンカーによる避難所への水の運搬や排泄物処理車両トラックによる仮設トイレに貯まった排泄物の除去を行いました。また、看板やコミュニティ・チームを通して、限られた水の効率的な使用や排泄施設の清潔な利用についてなどの知識の普及を実施しました。本年度も、これらの活動を継続して行います。

⑦コミュニティ運営による初等教育プロジェクト

対象地域：アフガニスタン

(中央部および南東部9州の農村地域)

実施期間：2004年7月～2006年5月(2年間)

主支援者：ケア フレンス岡山

アフガニスタンでは、タリバン政権時代には女子は教育を受けることができず、いまだにその教育システムは世界で最も劣悪であるといわれています。この事業は、教師、コミュニティ、地方教育行政機関のキャパシティを高め、コミュニティにより運営される学校での活動を通して、遠隔地のコミュニティの生徒が質の高い初等教育を受けられるようにすることを目標としています。

昨年度は、主に教師に対する現職研修、再教育研修、教材開発研修を実施しました。また、村教育委員会のメ

ンバーに対して、女子が教育を受ける権利、コミュニティによる学校運営、政府との連携などについての研修を行いました。本年度は、これらの活動を継続するとともに、引き続き生徒(約60%は女子)に対する教材の提供も行います。

2. 国際理解教育事業

レインボー事業

対象地域：カンボジア(カンダール州、ルックダイク地区)、日本国内

実施期間：2000年7月～2006年6月(6年間)

支援者：(財)大阪コミュニティ財団、ECC、Think the Earth、(株)東食、一般寄付など

この事業では、カンボジア対象地区の教育環境改善(貧困家庭の教育費負担の軽減、学習意欲を高める授業作り、美術の教師育成)およびカンボジア・日本両国の相互理解および国際交流の促進をはかることを目標としています。

最終年度となる本年度は、例年通り、日本の小中学校からカンボジアの子どもたちに対する文房具や作品などの寄贈、カンボジアにおける絵のワークショップの開催などを行います。国内においては、カンボジアの子どもたちの作品を日本の子どもたちに贈呈するとともに、作品の展示会を実施します。

また、6年間の事業の総括として、カンボジアにおいて、教師、運営委員会、村人、生徒に対するインタビューやアンケートなどを実施し、これまでの活動の評価を行います。国内においては、ケア・カンボジアの担当スタッフの来日による講演・展示会の開催や国際理解教育の推進を目的とした各学校への巡回展示会の実施を計画しています。

3. 新事業開拓

1) 現在、実施しているスリランカにおける「プランテーション居住者の生活改善事業(p.6の④を参照)」に続く事業として、「紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト」を申請中です。

2) カンボジア、ラオス、東ティモール、インドネシア、ネパールの中から複数の事業を選定し、現地訪問や現地事務所との協議を通して、2～3つの新規事業の実施を目指します。また、並行して、新ドナーの開拓にも努めます。

フィールド 最前線

グローバル・ アクション・ ウィーク2005に 参加して

サマキ クマールII
プロジェクト・マネージャー

遠藤 恵



イベントにて、人身売買の問題を取り上げてロールプレイを行う少女

女子教育事業サマキクマールIIは、経済的・社会的に厳しい状況にある女子が、生きる力となる教育を受けることができるよう、親、コミュニティの人々、地方行政機関と協力して様々な活動を行っています。主な活動は、小学校高学年に在籍する女子への奨学制度、村での識字教室運営、さらに親やコミュニティの女子教育への理解を高めるための意識向上ワークショップです。

これらの活動のほかに、サマキクマールにおいて重要とみなして参加しているイベントがいくつかあります。今日はその中の一つであるグローバル・アクション・ウィーク (Global Action Week) を紹介したいと思います。

グローバル・アクション・ウィークは、教育のためのグローバルキャンペーン委員会 (Global Campaign for Education) によって運営されている年次世界イベントです。この行事は世界中の誰もが教育を受けることができるよう、子どもたちが政治的な力を持った大人に対して訴えます。今年2005年のグローバル・アクション・ウィークは、世界中の政府が、国連の貧困撲滅に向けたミレニアム開発目標を達成するために積極的な行動を起こすよう求めることを目的として行われました。

カンボジアでは、CAREを含む21のカンボジアのNGOおよび国際NGOがこのイベントに参加しました。アクション・ウィークの4月23日～27日の間、カンボジアの各地において多くの子どもたちがさまざまな方法で政治家や行政関係者に「大切な友だちに教育を (Send my Friend to School)」と訴えました。サマキクマールは、人身売買や性的搾取から女子を守るためのプロジェクトを行っているワールド・エジュケーション (アメリカに本部を置くNGO) と協力し、4月26日にプレイベン州でグローバル・アクション・ウィーク2005を実施しました。

女子、地域の人々、教育省関係者を含む行政関係者など総計542名が集まりました。サマキクマールの活動地域からは、21名の識字教室に通う女子が参加し、このうちの2名が地区の知事と教育省職員の前で友人の状況を訴

え、そして社会・経済的に厳しい状況にいるすべての子どもたちがみな教育を受けることができるよう強く求めました。彼女たちの発表の一部を紹介しましょう。

「みなさん、こんにちは。今日は私の友だちのスレイソーのことを知ってもらおうと思い、ここに来ました。知事、教育省の方にぜひ私たちの置かれている状況を理解して、行動を起こしてもらいたいと思います。私がこれから読む手紙は私の友人スレイソーが書いたものです。よろしくをお願いします。



“私は19歳です。私には6人の兄妹がいます。お兄さんは21歳です。兄は小学4年生のときに退学し、スイカ農園で働きはじめました。今はプノンペン市の建設現場で日雇い労働者として働いています。私は兄妹のなかで2番目です。家の手伝いをしなければならず、小学3年のときに退学しました。妹たちは学校に通っています。

私の家族は米麺を作って生計を立てています。米を作る土地はありますが、そこで収穫される米だけでは麺を作るにも、家族が食べていくにも十分でないため、知り合いから米を買わなければなりません。ですから麺を売って得ることができる利益はとともわずかです。私の家の屋根は長い間、壊れたままです。修理をするお金もありません。ですから、雨期になるとどこかに身を寄せなければなりません。

私の両親は、私にプノンペン市で仕事を探させるために近隣から35ドル借りました。私はプノンペン市で仕事を探しましたが、読み書きができないという理由でどれも雇ってくれませんでした。本当にかっかりしました。読み書きができないということが、くやしくて仕方ありませんでした。もし、ちゃんと教育を受けていればきっとほかの人と同じように仕事を見つけることができたとと思います。

そんなときCAREのサマキクマールプロジェクトが識字教室を始めると聞きました。勉強する機会がもてると知ってとてもうれしかったです。今、識字教室に通っています。家庭環境は大変ですが、一生懸命勉強しています。麺を売って、それから識字教室に行きます。仕事をしながら勉強していますが、教室に行くことができる日は遅れたことはありません。



イラストの切り抜きにサインする教育省関係者



学校に通えない友だちについて訴えるために作られたイラストの切り抜き

私の両親は酔うと私や兄妹に暴力をふるいます。ほとんど毎日酔っぱらい、私に酒をつがせます。そして、私の識字教室に行くな、読み書きなんてなんの役にも立たないと怒鳴ります。こういう状況になると私は識字教室に行きたくても行くことができません。識字教室に行かなくても両親は大声で村中に聞こえるぐらいの声でのしり続けます。私は自分の環境が恥ずかしく、逃げ出したい気持ちでいっぱい、薬を飲んで死のうと思ったことがあります。でも、友だちや先生が励まし、元気づけてくれたので、もう死ぬことは考えなくなりました。

今はとにかく識字教室で一生懸命勉強しています。私は、教室に通う前と今とは違います。今、私は以前よりも麺を売ることができるようになり、新しいアイディアもあります。そして、読み書きもできます。識字教室が終了したらまた仕事を探すつもりです。

みなさんにお願ひがあります。村にいる私のような女子たちに技術を学ぶ機会を作ってください。そうすれば将来、自分たちで仕事を始めることができます。どうぞお願いします。”



以上、私の友だちのスレイソーから

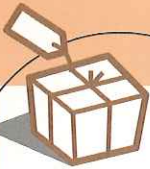
の手紙でした。知事の方、教育省の方、どうぞスレイソーのような女の子たちを助けてください。すべての子どもたちが教育を受けることができるようにしてください。お聞きいただいてありがとうございます」

女子たちの発表の後、知事、教育省関係者から彼女たちの訴えに対する意見が述べられましたが、残念ながら彼女たちの願いを積極的に汲み取るスピーチはなされませんでした。彼女たちの心からの訴えが具体的な成果を出すためには、政治家や行政関係者たちに意見を述べるだけでなく、より戦略的な計画をもって働きかける必要があります。これはカンボジア各地で行われたイベントすべてに共通する課題です。来年のアクション・ウィークに向けて、NGOはさらに具体的な対策を考えなければなりません。大きな課題は残されていますが、こうした小さなイベントの積み重ねが彼女たちを力づけると信じています。

サマキクマールIIが開始してすでに1年半が過ぎ、活動の成果が少しずつ現れてきました。スレイソーを含む識字教室受講者の68%が9カ月のコースを終え、去る7月に教育省から修了証

書を受け取りました。修了者の62%の女子が現在ポスト識字教室にて学業を継続しています。そこでは保健衛生、母子保健、感染予防など生活に直接関連する情報を網羅した教材を利用し、女子たちの識字能力向上に努めています。将来、母となる女子たちの保健知識向上は次の世代の子どもたちへのよりよい生活を約束します。

スレイソーのような状況にいる女子たちへの教育機会が約束され、また、これまでの活動による成果が持続可能なものとなるには、女子、親、コミュニティ、自治体そして地方教育局等との確かなつながりが大切です。このつながりを形成するためにサマキクマールIIは、コミュニティの人々からなる女子教育支援グループと連携して活動を運営しています。



カンボジア発スマイル宅配便

Smile from Cambodia

サマキ クマールII—子どもたちの結束

サマキ クマールII プロジェクト・マネージャー 遠藤 恵

サマキ クマールIIの対象地域は、ベトナム国境近くの本コン川沿いに位置します。毎年雨期になると本コン川氾濫による洪水に見舞われ、人々のすでに不安定な暮らしがさらに脆弱な状況に追いやられます。今年は雨期の始まりが遅く、早魃の被害も報告されています。地域の人々の、特に母親の教育レベルは低く、またコミュニティ全体の女子教育に対する

理解は限られています。女子は一家の重要な働き手としてみなされ、経済・社会・環境的に非常に厳しい状況にある家庭では、女子は家庭内や農場での労働はもちろん、農閑期には都市へ出稼ぎに行き、家族を支えなくてはなりません。

サマキクマールIIでは、このような状況にいる女子が、生きる力となる教育を受けることができるよう、小学

校高学年女子への奨学制度、識字教室の運営、そして親や地域の人々を対象に女子教育に対する意識向上ワークショップを行っています。また、これらの活動から得られる成果が持続可能なものとなるよう、女子教育支援の枠組み作りを地方行政体などと協力して構築しています。

19歳で小学5年生のホル・ソヴァンは、サマキ クマールの奨学生として選ばれました。生活は非常に不安定ですが、彼女には教育を続けたいという強い意志があるからです。ソヴァンの家は8人家族で、ソヴァンは母親、姉3人、弟3人と住んでいます。父親の家庭内暴力がひどくなったことが原因で、2年前にソヴァンの両親は離婚しました。それ以来、ソヴァンの生活はさらに厳しくなり、その日その日を生きるのが精一杯の状態です。

ソヴァンの家族は米や野菜を育てる土地を持っていないので、生計を立てていくためには薪と野原で炒め物に利用できる草を集めて売るしかありません。早朝から夕方まで、ソヴァンは家族と一緒に市場で売る薪と草を探します。休まず一日中働いても、日に2000リエル(0.5ドル)しか得られず、家族のための食料を買うにはとても足りません。

このようにソヴァンの家族は非常に貧しいのですが、

母親はソヴァンと彼女の兄弟を学校へ通わせ、高等教育を修了させたいと考えています。なぜなら、ソヴァンの母親は、サマキ クマールの意識向上ワークショップに参加して、教育は子どもたちが自信をつけるのに役立ち、教育によって子どもたちによりよい将来が期待できることを知ったからです。ソヴァンもまた、奨学金を受け、教育の重要性を伝えるサマキクマールのワークショップに参加してからは、学校を欠席することがほとんどなくなりました。ソヴァンは家の手伝いもしなければなりませんが、毎日休まず学校へ行くよう努力しています。

サマキ クマールが始まってから、多くの貧しい家庭の女子たちが教育を受ける機会を得て、親たちはコミュニティで教育について話すようになったと、ソヴァンの母親は言います。小学2年生で学校をやめたソヴァンの姉の一人は、現在はソヴァンから読み書きを習っています。彼女は自分のために学習することを楽しんでます。

サマキクマールは、カンボジアのプレイベン州でソヴァンのような女子たち約1400人を支援しています。

私スタイルのCAREライフ

スリランカへの特別な想い、 そして顔の見える支援活動

株式会社 生活の木 / Tree of life(pvt)Ltd. 重永 忠
代表取締役社長



スリランカという国と私どもとは特別な関係にあります。日本におきまして私たちはスリランカの大切な恵みを頂戴しています。そのスリランカが大変なことになりました。2004年12月26日に押し寄せたスマトラ沖地震による津波です。私どもはスリランカにおきましてリゾートホテルやアーユルヴェーダ施設を営んでおります。その経営もようやく軌道に乗りましたところ、この残酷なる自然災害を受け、経営上大きなダメージとなるに違いないという危惧を抱き、その後数日間考え込んでおりました。幸いにも弊社ホテルには被害がなかったのですが、被災地に対して何か自分たちのできることで支援していきたいということを実際に考え始めました。現地に入り込

でやみくもに活動しても、素人の我々では活動の邪魔になるだけとのことも知っておりまして、むやみやたらに金銭的な支援を行っても、その用途については自分たちには伝わってこないであろうし、いったいどうしたらよいものか悩んでおりました。

年が明け、あるご縁から現ケア・インターナショナル ジャパン常務理事・事務局長の野口千歳さんにお会いいたしました。野口さんは災害当日、現地ゴールにて津波を体験し、直後に緊急支援活動をされました。その野口さんより、現地でご実行されました緊急支援活動のことをお聞きし、ケア・インターナショナル ジャパン様が“人としての尊厳をしっかりと考えられた人道的支援”を行ってられますことに共感しました。私どもとしましては実際の活動面での協力をケア・インターナショナル ジャパン様に託していきたいという結論に至り、早速その活動資金に充てるべく義援金の募集活動を開始しました。

日本での義援金の募集につきましては、日本国内60店舗の生活の木の直営店舗にて募金窓口を設置し、さらに支援の輪を広げることとを目的としたチャリティーコンサート「がん

ばれ! スリランカ」を実施いたしました。チャリティーコンサートにつきましては、昨年11月にスリランカ・コロンボで開催された芸術文化アワードにおいて日本の親善役を務められた、歌手の沢田知可子さんご夫妻を中心に、お心ある日本の音楽家の皆様から無償で音楽を通じて力を貸していただきました。そしてこれらの収益をケア・インターナショナル ジャパン様のスリランカ復興支援活動資金としてお役立ていただきたく寄付をさせていただきました。

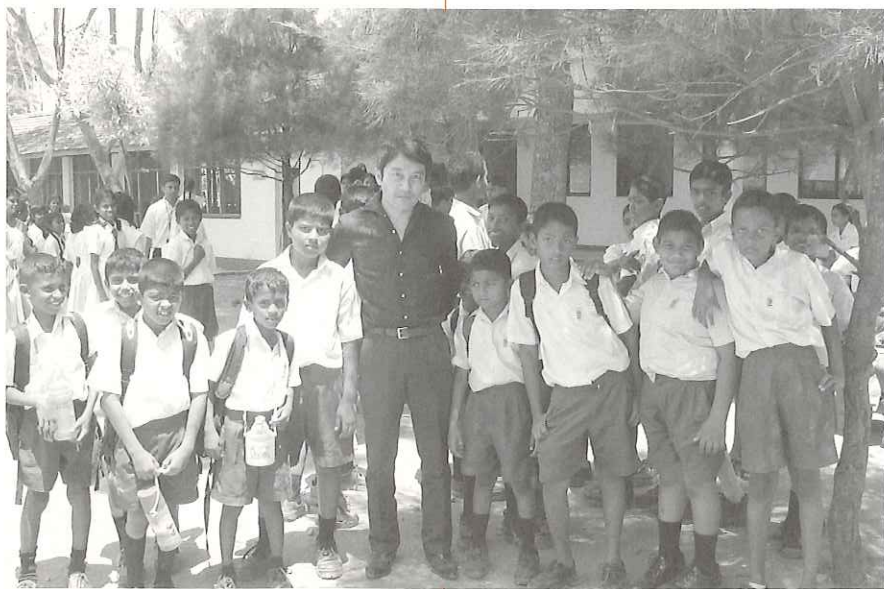
もうひとつ、スリランカにおいては、直接目に見える形の支援を、スリランカの私どもの現地法人Tree of lifeと共に実行できないかと考えました。その結果、私たちは「仮設住宅の建設」「学校の教育復興支援」そして「アーユルヴェーダ医院の経営復興支援」の3つを“直接的支援”として自ら実行することにしました。そのための資金的支援につきましては、生活の木の社員、そして私の個人的な社外プレーンの皆様に対してお声がけをし、この3つの支援に充てることのできる心もった義援金が集まりました。さらに、スリランカ・コロンボの音楽ホールにて現地でのチャリティーコンサートを私ども主催で企画・運営をし、日本でのチャリティーコンサート「がんばれ! スリランカ」にご協力いただきました沢田知可子さんご夫妻にご出演いただきました。お陰さまで現地においても多くの支援の輪を広げ、多くの支援資金を得ることができました。ここでの収益は、既に仮設住宅の建設資金として役立たせていただいております。

このような形で年初より支援活動をしてまいりましたが、私自身も今年3月、4月と直接、被災地を訪問し、その結果を自ら確認してまいりました。直接の支援をさせていただいた所も訪れ、被災者の方たちと直に触れ合うことにより、逆に彼らより教えていただいたことは、前向きに、元気に、そして明るく頑張っているまさに「生きる力」でした。ケア・インターナショナル ジャパン様が主催した津波写真展において場所の提供や広報の面などで協力しましたのも、悲壮感の漂う写真ではなく、前向きに元気に生きようといったことが感じられる写真でありますことから賛同しました。

私たちのスリランカに対してのこの特別な関係と想いは、ケア・インターナショナル ジャパン様と共にこれからも続いていきます。



支援先に提供した仮設住宅の一部と被災者の住民



支援先の学校生徒と

将来の夢を確信した一夏

ロンドン大学LSE 国際関係学部 齊藤 百合

CAREでのボランティアについて考えるきっかけとなった、「African Diary」という本を紹介してくれたボーイフレンドと



帰国後、スタッフから贈られたTシャツを早速着て、大学で撮った写真を送ってくれました

生まれはパリ、育ちはアルジェリア、スペイン、タイ、そして現在はロンドンの大学に通っている、家族とパスポートだけが日本人な私。海外生活を送り、外国人の友だちと付き合っていくうちに自然と世界情勢や国際関係に興味を持つようになりました。8才の頃から国連の「ファン」で、将来の夢は獣医か世界平和に貢献する人でした。高校生頃からアムネスティ・インターナショナルのイベントの計画・実行を手伝ったり、模擬国連の事務総長を務めたり、反イラク戦争のデモに参加したりと、とても活発的に国際的な活動をしてきました。そして今は、化学が苦手なことから獣医の夢を諦め、ロンドン大学LSEで国際関係学を専攻し、外交政策、国際機関、国際法、中東問題などを勉強しています。

イギリスの大学生は、皆2年生の夏休みは働くため、大学ではインターンシップ・フェアや資料が豊富にあり、私、はりきって夏休みの就職活動を始めたのです。しかし、講演をしに来る企業、そして就職活動のメルマガで入ってくる情報は全て金融関連。回りの友だちはみんなそのような仕事を希望し、どの企業が一番給料が高いかなどを熱心に話し合った。そんな中で私は一人だけもっと国際的な、直接世界に貢献するような仕事を望んでいた。

「やっぱり私は夢が大きすぎるのかな」と思い始めていた頃、私みたいに世界を舞台に活躍することに憧れている彼がイギリス人の著名人ビル・ブライソンの「African Diary」を貸してくれた。これはCARE International UKのケニアでの事業をユーモラスに紹介している本です。バス停でこの本にのめり込み、バスを逃したこともあるほど夢中になって読みました。CAREは、タイにいる頃、古着やおもちゃを寄付したこともあり、大学の文献にもよく出ていたので基本的なことは知っていましたが、この本を読み、事業の持続性をいかに重視し、「人」を大切にしている団体かということを実感しました。CAREの単なる支援を与えるだけでなく、

地域の人々と一緒にコミュニティの開拓を図るといった立場に感動しました。

この本に鼓舞され、CARE International UKのボランティア制度について調べたがCARE International UKではボランティアの機会が少ないのか、「ロンドン事務局でボランティアする機会は常にあるわけではありません」や「ボランティアは必要となりましたら募集しますので、そちらから願書は送らないでください」となるとも冷たい雰囲気。しかし、諦めきれずにウェブサイトを見ているうちに日本にもCAREがあることが判明。すぐさまボランティアの機会があるか問い合わせたら、とても友好的な返事が来た。CAREで働けるのなら、慣れない東京でも頑張れると思い、今夏は2年ぶりに母国の日本に戻ることを決意した。

実際にCARE International Japanに来て、「世界のCARE」が日本ではこれほどまでも知られていないということに驚きました。しかし、このため、ウェブサイトの翻訳や事務作業を通してNGOのマーケティング戦略や広報活動の大切さなど、大学ではあまり焦点が当



オーストラリア人の親友とロンドン・ライフを満喫!



当財団事務局にて。毎日、その英語力を生かして、本当に多くの部分でお手伝いいただきました

Our Supporters

会員、寄付金協力者紹介

(2005年5月1日～10月31日)
(敬称略・50音順)

みなさまの温かいご支援に事務局スタッフ一同、心よりお礼申し上げます。

●個人賛助会員 (新規)

佐藤 健治
柴田 昌春
笠井 浩史
Laurent Sauveur

●個人準賛助会員 (新規)

石川 正久

●法人会員(新規) (株) VSN

●パッケージ会員 (継続)

天羽 節子
飯田 多美
石黒 秀彦
泉 聡司
市川 直子
伊東 直
大町 竜頭
香取 昭
刈谷 敏久
河本 泰行
庚 珍化
菊地 恵美子
近藤 春恵
酒井 恵美
酒井 健
桜井 純子
瀬尾 佳伸
竹内 智之
中谷 庄八
成瀬 富美子
畑山 悦子
嶋中 由紀夫
松崎 史夫
三浦 みどり
水谷 素彦
安則 和子

●法人会員(継続)

財団法人国際協力
推進協会
有限会社西片企画

●個人賛助会員 (継続)

赤坂 彰夫・秀子
秋山 剛康
渥美 伊都子

安斉 徹男
池田 有宏
石戸谷 由子
井上 恵美子
井上 勝六
岩井 昭
岩田 和己
岩本 妙子
上杉 治
上村 尚子
小川 朝子
奥山 幸猛
小倉 知巳
小野 英一郎
柿澤 弘治
柿原 浩太
数原 孝憲
加嶋 昭男
金田 平夫
鴨下 博
川口 順子
北川 曉子
黒川 千万喜

黒河内 康
黒田 則子
小塚 実千代
後藤 健
佐渡 弘・ユリ子
澤田 乃輔
柴岡 珠理
渋沢 厚美
渋谷 奈穂子
菅原 次朗
菅原 明夫
鈴木 生子
添田 幸恭
染谷 恵司
高島 直一
高瀬 覚照
高津 一正
高橋 澄江
田中 厚彦
塚原 国男
遠山 正俊
中島 清美
中野 紀美代
永田 俊一
新関 千鶴
菲澤 嘉雄
野口 千歳
野口 晏男
服部 純市
鳩山 安子

日比 みづ江
降旗 健人
本田 亨道
増井 潔
御巫 望子
峯岸 和永
宮戸 慎一
三輪 長正
諸井 政昭
柳井 良子
矢吹 真人
山中 康平・博子
山本 卓弘
横山 克美
吉田 紀子
吉田 正美
吉原 幸一郎
吉満 博
吉村 精仁
和久本 芳彦
(財)博慈会

●個人準賛助会員 (継続)

伊藤 英夫
畷部 和男
内田 三美
角 充弘
呉服 雅子
鹿野 好子
白木 良和
田上 富子
中尾 あぐり
中村 政憲
四宮 涼子

●寄付金協力者

芦原 俊介
天野 森
石井 栄子
稲川 素子
犬飼 星斗
犬飼 裕子
浮貝 鈴子
角 充弘
笠井 浩史
加藤 尊明
新関 博
河本 茂夫
久保 五利
酒井 文男
[(財)日本ボール
ルームダンス連盟]

渋沢 厚美
遠山 正俊
丹羽 勇夫
ほりこし のぶひろ
諸井 政昭
やまだ まさる
山中 康平・博子
山本 卓弘
やまもと ひろや
横田 笑
Matt Archibald

アジア婦人友好会
医療法人清仁会洛
西シミズ病棟
ういっちいず ぶろ
じえくと
(特活)環境アリー
ナ研究機構
ケア フレンズ岡山
ケア フレンズ札幌
ケア フレンズ・東京
ケア・サポーターズ
クラブ大分
(株)スペースポート
ダイヤ精密株式会社
日本デジタルコミュ
ニケーションズ株式
会社
(株)ファミリー
フロントコーポレー
ション
ECC総本部

●夏募金協力者

青山 絢子
青山 歌子
秋谷 幸一
秋谷 真美
秋谷 征子
天野 武雄
新井 美代子
石田 紀男
石戸谷 由子
石原 由記子・明子
泉山 高清
伊藤 英夫
今井 隆吉
今村 達男
岩切 慎子
岩崎 祥一
岩本 妙子
植田 東子

植村 淳子
魚本 秀
羽坂 哲子
海野 光雄
生川 カズ子
大河原 良雄
大曾根 義子
大竹 静香
大橋 津満子
岡本 介三
岡本 太一
小川 梨み
長船 昌吾
小沢 憲
尾島 昭次
角 充弘
影山 光太郎
笠松 真理子
数原 孝憲
桂 秀子
上坂 千代
川上 道一
川島 敏彦
菊地 恵美子
北岡 さよ子
北川 曉子
黒井 満
小泉 潔
小井土 喜代子
黄金井 達夫
小島 しのぶ
後藤 義孝
小林 英一
小林 正樹
小武家 暁子
小堀 宗武
小谷中 剛
是枝 隆定
斉藤 正子
佐伯 佳代
榊原 五子
佐々木 友子・貴士
佐渡 弘・ユリ子
佐藤 健治
佐藤 賢司
澤田 乃輔
山東 昭子
三瓶 正子
鹿野 好子
嶋原 修次
柴田 享美
渋沢 厚美
庄司 滋明

白石 露
白髭 真理子
菅沼 みゆき
菅原 規仁
鈴木 政夫
鈴木 靖郎
鈴木 由美子
墨岡 宏
諏訪 孝
関口 義久
平 和代
高島 倫子
高嶋 正明
高瀬 覚照
高橋 キヌ
高橋 良郎
高島 美人
高比良 昌一
武田 恭子
田中 宏
谷口 七郎
塚原 国男
堤 功一
角田 禮子
数原 孝憲
桂 秀子
上坂 千代
川上 道一
川島 敏彦
菊地 恵美子
北岡 さよ子
北川 曉子
黒井 満
小泉 潔
小井土 喜代子
黄金井 達夫
小島 しのぶ
後藤 義孝
小林 英一
小林 正樹
小武家 暁子
小堀 宗武
小谷中 剛
是枝 隆定
斉藤 正子
佐伯 佳代
榊原 五子
佐々木 友子・貴士
佐渡 弘・ユリ子
佐藤 健治
佐藤 賢司
澤田 乃輔
山東 昭子
三瓶 正子
鹿野 好子
嶋原 修次
柴田 享美
渋沢 厚美
庄司 滋明

本田 早苗
 松井 おさむ
 松田 茂之
 松葉 芳子
 三島 弘子
 三井 達彦
 満島 フミ
 宮川 武夫
 宮杉 明義
 村上 悦雄
 村瀬 礼子
 森脇 道子
 諸井 政昭
 師田 志津恵
 矢沢 歌子
 柳下 明美
 矢吹 真人
 山岸 美智子
 山崎 勝之
 山田 恭子
 山田 那津子
 山中 康平・博子
 山本 克子
 山本 卓弘
 横田 秀子
 横田 笑
 横山 富美子
 吉田 正美
 吉田 美佐江
 吉原 幸一郎
 吉満 博
 吉村 精仁
 米田 清郎・順子
 領毛 幸子
 和久本 芳彦
 渡辺 省三
 渡辺 糸み子
 渡会 武嗣

染谷 政男
 高橋 克己
 田川 幾子
 田沢 百合
 土山 眞一
 寺脇 かつ子
 内藤 伸広
 新山 満男
 丹羽 孝司
 花澤 勝也
 広段 隆
 福生 隆・地伽子
 北條 成子
 本田 敏夫
 増田 三千八
 松岡
 山上 義人
 山田 那津子
 山中 千賀子
 吉田 由美子
 芳村 恵以子

アメリカンスクール
 イン ジャパン
 ギブソン スクール
 オブ イングリッシュ
 ケア フレンス岡山
 大本信徒連合会
 (株)東京ドーム
 (特活)パブリックリ
 ソースセンター
 連西寺
 (株)DNA
 E C C 総本部
 GEキャピタルリーシ
 ング
 (株) VSN名古屋営
 業所

**●パキスタン地震
 緊急募金協力者**

相島 洋子
 青木 幹多
 青柳 萬亀子
 青山 絢子
 青山 歌子
 秋谷 征子
 秋山 光子
 秋山 剛康
 皆 礼子
 浅尾 新一郎
 朝岡 みよ
 浅田 正文
 浅野 孝子
 浅見 晃一郎
 芦原 俊介
 東田 尚子
 阿部 靖彦
 天野 森
 天野 ユキエ

荒井 弘男
 新井田 かつ子
 荒川 玉江
 有野 博實
 有藤 久
 生稲 精子
 池 淳一
 池上 哲二
 池田 良江
 石井 幹子
 石井 栄子
 石戸谷 由子
 石原 一子
 石原 清宏
 石渡 咲子
 泉 聡司
 泉 忠
 泉山 高清
 伊勢 キヨ子
 井田 三智子
 板垣 章
 一柳 邦男
 伊藤 篤子
 伊藤 由里子
 伊東 直
 伊藤 ルミ
 稲川 素子
 稲田 謙三
 稲森 禮子
 井上 恭子
 井上 徹夫
 今里 悦子
 今沢 新
 今村 昭子
 今村 達男
 岩井 昭
 岩切 慎子
 岩田 貴美子
 上杉 治
 上田 美江子
 上野 愛
 上野 幹雄
 上野 俊子
 植之原 道行
 上林 實
 上原 綾子
 上村 辰夫
 魚本 秀
 内ヶ島 敏博
 内田 英子
 内田 三美
 内田 よしえ
 海野 光雄
 梅山 ミト子
 江崎 清子
 枝 順子
 海老原 孝治
 江良 充久
 遠藤 都志恵
 大内 八郎

大岡 純雄
 大河原 良雄
 大木 誠
 大島 寿美子
 大須賀 敬子
 太田 清蔵
 大塚 福恵
 大塚 美代子
 大庭 光義
 大貫 努
 大橋 和江
 大橋 津満子
 大橋 きよ
 大浜 幸子
 大町 電頭
 大道 富士雄
 大山 ひろみ
 岡崎 二三
 尾形 孝
 岡庭 明彦
 岡本 豊三
 岡本 太一
 小川 糸み
 小川 健
 小川 朝子
 小川 ひとみ
 沖田 晋吾
 尾崎 あや子
 小沢 太郎
 小沢 憲
 小田 泰子
 鬼塚 邦雄
 小野 折恵
 小野田 章司
 小野塚 喜久代
 小早川 由紀子
 織原 正樹
 甲斐 道子
 海瀬 祥子
 香川 雄治
 柿澤 弘治
 柿沼 實
 角 充弘
 掛山 光太郎
 掛川 厚
 笠井 浩史
 笠松 真理子
 数原 孝憲
 片桐 加寿子
 片倉 邦雄
 桂 弘
 桂 秀子
 桂川 洋子
 加藤 みゆき
 加藤 大智
 加藤 堯
 門田 ヨシ子
 香取 昭
 金井 洋子
 金子 淑恵

金子 邦雄
 金坂 政忠
 金城 弘明
 金田 平夫
 鎌田 節子
 上坂 千代
 神澤 清
 神野 羊子
 上林 市朗
 亀井 信子
 亀島 未喜
 亀山 容
 唐木 幸恵
 唐木 知直
 河井 充幸
 河合 正修
 川浦 幸光
 河上 麻紀
 川上 厚紀
 川口 まゆみ
 川島 久典
 川島 周平
 川島 満
 川城 正信
 川瀬 キヌ子
 河中 三重子
 川西 衣子
 川西 小八郎
 川端 啓子
 川俣 一郎
 川村 千鶴子
 河本 泰行
 庚 珍化
 神田 幸子
 神田 成子
 木内 やい
 菊池 正男
 菊地 恵美子
 岸尾 修
 岸本 桂子
 木田 満
 北岡 さよ子
 北口 正己
 北林 照助
 北原 政澄
 木下 是雄
 木下 和子
 木村 欣二
 木村 トシ子
 木村 博
 木村 正博
 久後 彦夫
 草川 益美
 串田 吟
 楠元 優
 久野 孝子
 栗原 晴美
 小井土 喜代子
 工 信之
 瀧 優香

高鹿 栄助
 古賀 秀彦
 五木田 邦子
 小倉 婦美子
 小平 靖
 小平 陽子
 後藤 博子
 後藤 健
 小貫 茜
 小畑 祐悌
 小林 静子
 小林 憑四郎
 小林 立
 小林 正樹
 小林 英一
 小林 晋
 小林 正
 大和 喜代美
 小林 照夫
 小林 百合子
 小林 代志江
 小堀 宗武
 是枝 隆定
 近藤 トシ子
 齋藤 安津士
 齋藤 千代美
 齋藤 俊子
 齋藤 正子
 佐伯 佳代
 佐伯 継一郎
 酒井 恵美
 坂井 加寿美
 酒井 弘雄
 坂上 忠
 阪上 正昭
 榊原 真美子
 坂本 陽介
 笹川 幸子
 佐々木 友子・貴士
 佐々木 美晴
 佐渡 弘・ユリ子
 佐藤 安正
 佐藤 かおる
 佐藤 賢司
 佐藤 千恵子
 佐藤 昭博
 佐藤 健治
 佐藤 幸子
 佐藤 妙子
 澤田 乃輔
 塩田 尚子
 塩田 由美子
 鹿野 好子
 穴倉 敏雄・ユキ子
 下ノ本 佐知子
 実平 進
 篠田 理恵
 柴田 繁睦
 柴田 淑子
 柴田 美保子

Our Supporters

| | | | | | |
|---------|------------|----------|--------|----------|----------------------|
| 嶋 由昭 | 太刀掛 侑子 | 新村 和子 | 堀岡 洋子 | 安田 光男 | 渡辺 康隆 |
| 島田 富恵 | 立花 悦子 | 西田 邦夫 | 本間 則恵 | 矢内 潤子 | 渡部 怜子 |
| 島田 宮子 | 田中 英夫 | 西谷 宏之 | 本宮 喜久枝 | 柳田 順達 | Mr&Mrs B.RAMCHANDANI |
| 清水 ヒサ子 | 田中 裕美 | 西村 君江 | 眞 伸子 | 柳下 明美 | (株) イースクエア |
| 下平 光子 | 谷口 七郎 | 西村 淳子 | 益田 敦子 | 藪木 謙一 | 金岡紙工 |
| 春藤 聡子 | 多昌 万裕 | 西山 敬三 | 増山 恵子 | 矢吹 真人 | (株) 岐東庭園 |
| 庄司 慈明 | 田村 泰雄 | 西山 キミエ | 町山 素子 | 山内 芥洲 | 久留目荒木郵便局 |
| 進谷 健 | 田村 希美 | 西山 瞳 | 松浦 葉子 | 山内 朱実・実華 | ケア・サポーターズ |
| 新保 敦子 | 辻 節子 | 丹羽 伸子 | 松尾 公平 | 山内 重信 | クラブ大分 |
| 新屋 英雄 | 土田 ヨウ子 | 根本 百合子 | 松川 祐子 | 山内 久子 | ケア フレンズ岡山 |
| 進来 富子 | 土田 聡子 | 野口 東 | 松下 一弘 | 山口 義雄 | サロンエステート |
| 末廣 清明 | 津村 憲 | 野口 晏男 | 松下 千奈美 | 山崎 勝之 | ジュネス宝塚寮 |
| 菅沼 みゆき | 鶴蘭 幸裕 | 野田 幸裕 | 松田 茂之 | 山 いよ子 | 新居浜アライアンス |
| 菅谷 弘 | 寺岡 紀美子 | 野中 稜市 | 松田 光枝 | 山崎 博子 | ス・キリスト教会 |
| 杉野 律子 | 寺田 正治 | 野畑 宏吉 | 松富 真佐留 | 山下 益子 | 聖心会 サービスセン |
| 杉村 朗 | 富樫 幸 | 野畑 由起子 | 松葉 芳子 | 山田 清一 | ター・ヘルプライン |
| 杉本 庄吉 | 戸井田 文枝 | 野村 健太郎 | 松本 修三 | 山田 みつゑ | 日本海綿業株式会社 |
| 杉山 | ドウトレイ 昌子 | 橋本 郁子 | 丸山 淳子 | 山田 ルイ | 金沢支店 |
| 鈴木 やすよ | ドウトレイ ジャック | 羽田 英彦 | 三浦 圭祐 | 山田 美江子 | 福祉協宮崎北部支 |
| 鈴木 治雄 | 徳田 とみ子 | 畠山 恵美子 | 三浦 華恵 | 山中 順雅 | 部一同 |
| 鈴木 政夫 | 徳永 孝司 | 羽木 徳子 | 三浦 みどり | 山中 康平・博子 | 普誓寺 |
| 須田 收 | 戸田 よし子 | 濱 堯夫 | 三木 一宏 | 山根 淳子 | 文京白山五郵便局 |
| 須田 雄子 | 富岡 慧 | 早川 清一 | 御木本 澄子 | 山本 美和子 | 職員一同 |
| 角 章子 | 内藤 重信 | 早川 清美 | 水谷 泰子 | 山本 重喜 | マネジメントプレーン |
| 住田 織枝 | 内藤 頼誼 | 早坂 芳子 | 水野 チヨノ | 山本 伸一 | 都築鋼産株式会社 |
| 諏訪 孝 | 永井 康夫 | 林 淳子 | 三井 達彦 | 山本 桃代 | (株) ムサシ |
| 関 孝之 | 中尾 あぐり | 林 ヒロ子 | 三ツ木 麗子 | 湯川 夏樹 | 武蔵村山市立第十 |
| 瀬能 孝敏 | 長尾 武子 | 原 禮之助 | 満島 フミ | 幸 暁美 | 小学校 |
| 千 宗室 | 長岡 興樹 | 半澤 孝磨 | 三原 恵子 | 横田 笑 | |
| 添田 和子 | 中川 久美子 | 日置 晋時 | 三村 愛子 | 横田 謙 | |
| 曾田 泰子 | 永川 春光 | 東 末子 | 宮川 慎二 | 横田 英夫 | |
| 染谷 恵司 | 中澤 道明 | 樋口 晃子 | 宮川 武夫 | 横山 欽二 | |
| 平 和代 | 中島 保 | 樋口 隆則 | 宮澤 悦次 | 横山 勇 | |
| 高馬 赳夫 | 中島 千代子 | 久富 隆夫 | 三好 達 | 横山 賢 | |
| 高木 重知 | 中島 洋子 | 平塚 美智子 | 村上 眞樹 | 横山 幸子 | |
| 高木 富美子 | 長嶋 久子 | 平林 薫 | 村上 悦雄 | 横山 恒雄 | |
| 高島 直一 | 永末 美代 | 平松 高志・加代 | 村上 セイ | 横山 美穂子 | |
| 高嶋 正昭 | 中蘭 尚孝 | 平山 治子 | 村上 守 | 吉川 晋平 | |
| 高島 倫子 | 永田 俊一 | 広岡 欣之助 | 村上 孝子 | 吉田 恵介 | |
| 高瀬 覚照 | 中西 淳子 | 廣川 恒夫 | 村永 三郎 | 吉田 保 | |
| 高野 隆司 | 中野 喜久子 | 広島 桂一 | 村松 寅三郎 | 吉田 正美 | |
| 高橋 キ又 | 中野 紀美代 | 廣瀬 匠子 | 村山 良一 | 吉田 文雄 | |
| 高橋 智司 | 中野 光男 | 布川 由紀子 | 森 真理子 | 吉野 幸一郎 | |
| 高橋 良郎 | 中野 京子 | 富貴田 タツ子 | 森 時子 | 吉満 博 | |
| 高橋 律子 | 中平 立 | 福味 英子 | 森 定雄 | 吉村 精仁 | |
| 高橋 裕子 | 中満 一幸 | 福田 和美 | 森 泰造 | 吉村 有子 | |
| 高畠 美人 | 中村 亨 | 藤 ちえ | 森 拓三 | 米田 清邦・順子 | |
| 高藤 久也 | 中村 敦子 | 藤澤 葉子 | 森 棟子 | 米田 清 | |
| 高松 妙子 | 中村 敦子 | 藤永 康 | 森 理恵 | 米原 喜孝 | |
| 高本 善四郎 | 永山 治 | 藤本 たみ子 | 森下 泰夫 | 米山 克 | |
| 多賀谷 靖子 | 永吉 恵美子 | 藤保 惟通 | 森下 吉太郎 | 四宮 涼子 | |
| 滝谷 賢介 | 夏目 常男 | 藤山 信博 | 山口 静子 | 領毛 幸子 | |
| 滝山田 美智子 | 夏目 豊子 | 布施 博子 | 森田 史子 | 隣 佳子 | |
| 竹内 兼雄 | 鍋田 忠男 | 布施 あおい | 森田 千恵子 | 若松 千恵 | |
| 竹内 智之 | 成川 豊樹 | 古屋 英樹 | 森村 洋二 | 和久本 芳彦 | |
| 武内 正充 | 成瀬 義明 | 坊内 誠治 | 森本 接夫 | 和田 寛 | |
| 竹腰 郁代 | 縄 美雪 | 北條 真弓 | 森脇 道子 | 渡辺 彥み子 | |
| 田代 かよ子 | 新倉 康夫 | 坊農 えつ | 諸井 政昭 | 渡辺 一正 | |
| 多田 喜久子 | 新沢 美彦 | 堀内 昇 | 諸岡 孝昭 | 渡辺 省三 | |
| 多田 俊子 | 新関 千鶴 | 堀江 達 | 八木 勝恵 | 渡辺 寿子 | |
| | 新実 功 | | 安江 克子 | | |

CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.1
2005年11月30日発行 (季刊)
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel : 03-5950-1335
Fax : 03-5950-1375
E-mail : info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE Notice Board

スマトラ沖地震による 津波1周年イベント開催

日時：2005年12月25日(日)～29日(木)

場所：美術会館 ギャラリー青羅 (東京都中央区銀座)

昨年12月26日にスマトラ沖にて発生した地震による津波で多くの人々が亡くなり、また被害を受けました。CAREは、津波発生直後から緊急支援を開始、現在は復興に向けた事業を継続して行っています。津波発生から1年経った今年の12月末に、当財団では1周年イベントを開催します。この1年間の

CAREの支援活動や現在の現地の状況についてご報告させていただくとともに、さまざまな企画を通して事務局とCAREの活動をサポートしてくださる皆様との交流の場になればと思います。詳細は、当財団ホームページにて掲載予定です。多くの皆様からのご参加を心よりお待ちしております。



* 皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、感想などは、CARE World 誌面上にてご紹介させていただきます。また、「ケアの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に「CARE World」を広げていきたいと思ひます。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしております！